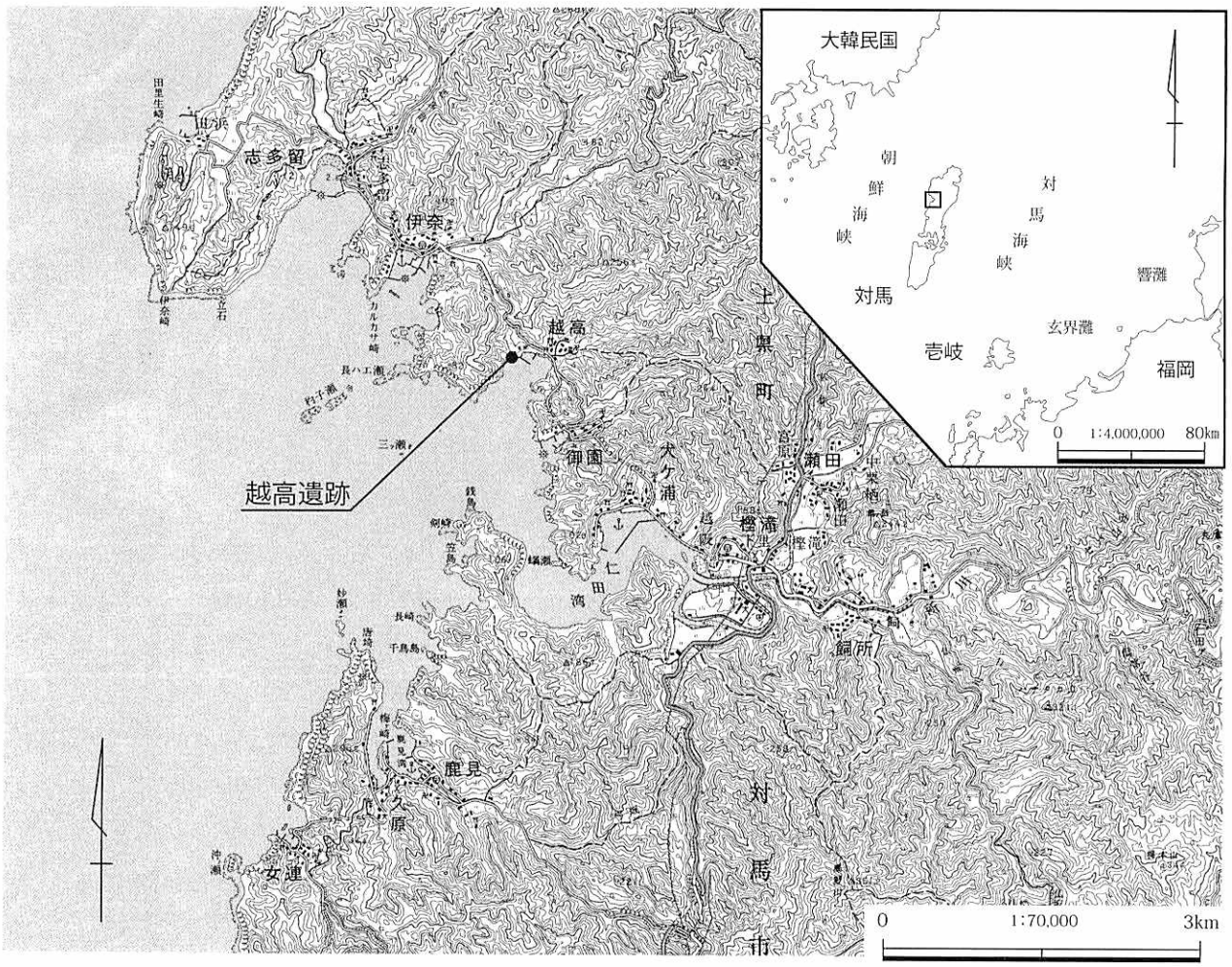
一　位置と環境

1．地理的環境

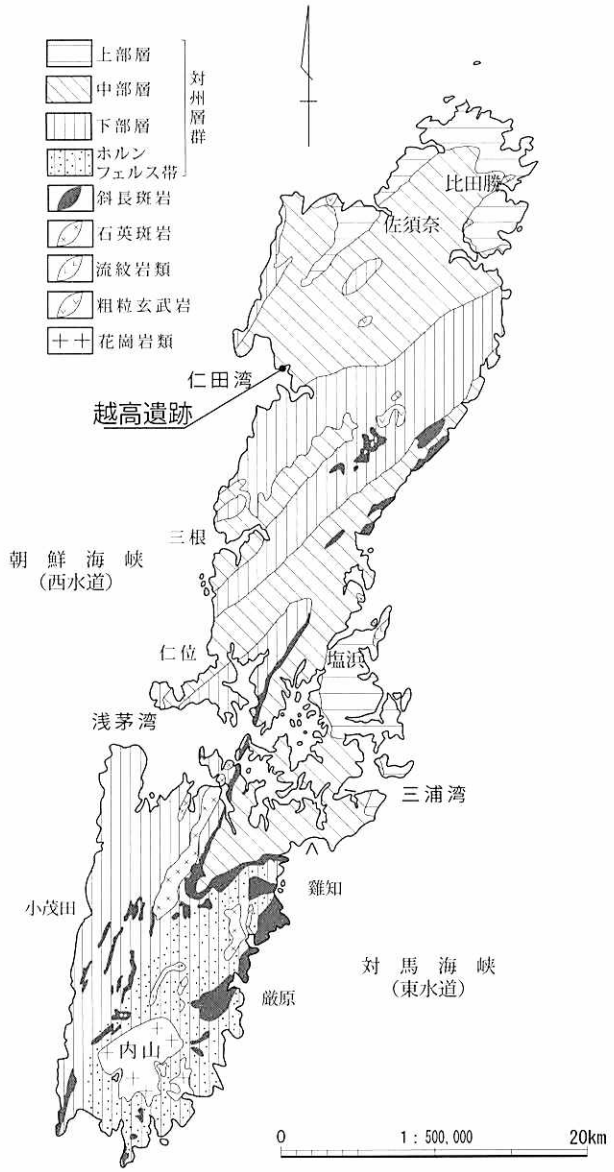
対馬の位置と地形　対馬は、朝鮮半島と九州の間に位置する長崎県の離島であり、北方の上島、南方の下島、および周辺の諸島からなる。上島と下島を合わせて南北長 72 km、東西長 16 kmであり、総面積は 708 ㎢である。北緯 34 度 42 分～ 34 度 5 分、東経 129 度 30 分～ 129 度 10 分に位置し、朝鮮半島から最短で約 50 km、福岡から約 100 kmと、九州本土よりも朝鮮半島に近いため、一般的に「国境の島」と呼ばれる。

陸地の９割は山地である。標高は全体的にみると南方が高く、北方が低い傾向にある。下島には、対馬で最も高い矢立山（標高 648 m）のほか 500 mを超える山々がある。山地の分水界は島の東に偏在する。このため川が短く東海岸には沖積地はほとんど形成されない。一方、西海岸には沖積地がわずかにあるが、河口に低地は発達していない。

対馬の海岸線は全長 750 kmと、長崎県内で第２位の長さをもつ。海岸線にはリアス式海岸と断層海岸の２種がある。リアス式海岸は浅茅湾や豊一帯にみられ、脚の長い入江の谷間に小集落が営まれ、遺跡も多く確認されている。断層海岸は西海岸の棹崎～田里生崎、中央部の御崎～豆酘崎、東海岸の



第１図　越高遺跡の位置



第２図　対馬の地質図（高橋 1992 を一部改変）

舟志（しゅうし）～佐賀（さか）間に顕著である。

対馬海峡は、およそ 19 km～ 56 kmあり、海峡の中央に位置する対馬を境にして東水道と西水道に分かれる。東水道を対馬海峡、西水道を朝鮮海峡とよぶ場合もある。西水道には細長い舟状の海釜があり、その最深部は約 210 ｍである。東水道には特に深い窪地はない。西水道にある海釜を除き海底は平坦で、海峡全域に水深 120 ｍの大陸棚が広がっており、この大陸棚は朝鮮半島と九州に連結している。

対馬海峡には黒潮の分流である対馬海流が流れている。対馬海流は最大潮流が 4.6 km / 時と、ほかの日本近海の海流と比べて流れが弱く、小規模な渦や蛇行を伴う特徴を持つ。

対馬の地質と環境　対馬の基本構成岩石は、対州層群と呼ばれる新生代第三期の頁岩と砂岩である。この層の厚さは６km以上に達する。頁岩と砂岩は、風化しやすく、浸透性、流水性が高いという特性をもつ。そのため対馬は耕地に向かず、土壌は保水率が低い。この対州層群の風化により生じた細長い小礫が、越高遺跡でも堆積層中に大量に含まれている。対州層群の中には一部火成岩も見られる。火成岩が対州層群に貫入することで山地が形成されており、千俵蒔（せんびょうまき）山や御嶽（みたけ）、権現（ごんげん）山がその代表である。

対馬の年平均気温は 14℃～ 15℃で、１月の平均気温は 5.7℃、８月の平均気温は 26.4℃である。対馬海峡には暖流である対馬海流が流れているため、冬は比較的温暖で、夏の気温上昇も少ない。対馬では照葉樹林が全域に生育している。植生は低地から高地へいくにしたがってスダジイ、イスノキ、ウラジロガシ、アカガシへと変遷していく。分布は限られているが、ヒトツバタゴやモクゲンジなども自生している。また、対馬には朝鮮半島と日本本土それぞれの特徴をもつ固有種が存在し、ツシマヤマネコ、コウライキジ、ツシマシカ、ツシマテンなどの動物が生息する。

越高遺跡の立地　上県町越高は町内を流れる飼所（かいどこ）川と仁田川が合流する河口付近にある。越高遺跡は、この越高集落から南東におよそ 500 ｍ離れた標高３～８ｍ地点に位置する。遺跡は仁田湾に面し、偏西風や波浪の影響を受けやすい環境にある。遺跡の南東部には礫で構成された浜辺が形成されている。また、北西部の斜面および遺跡周辺はかつて段畑として利用されていたが、現在は雑木林となっている。

（三浦）

2．歴史的環境

（1）対馬の原始・古代

縄文時代　旧石器時代の遺跡は現在明らかになっておらず、対馬で遺跡が確認されるのは縄文時代早期末からである。遺跡の多くは西海岸に分布しており、海岸付近の平坦地に立地している。

早期末から前期にかけての遺跡は、上県町越高に所在する越高遺跡がある。この遺跡からは、縄文土器や朝鮮半島系の隆起文土器、石鏃などが出土している。石器の石材には、北部九州の腰岳産の黒曜石が多く用いられている。隆起文土器の出土から、早期末からすでに朝鮮半島南部との交流があったと考えられる。

前期から中期にかけての遺跡は、上県町久原に所在する夫婦石遺跡がある。この遺跡からは、曽畑式や阿高式などの縄文土器、朝鮮半島系の櫛目文土器、石斧や石鏃などの石器が出土している。この遺跡は前期から中期にかけての、朝鮮半島との交流の痕跡が認められる重要な遺跡である。

中期から後期にかけての遺跡は、峰町佐賀に所在する佐賀貝塚や、豊玉町廻に所在するヌカシ遺跡がある。佐賀貝塚は、東海岸に位置する数少ない遺跡の一つである。この遺跡では、朝鮮半島系の土器や対馬近海に生息しない貝類などが出土しており、朝鮮半島との交流が行われていたと考えられる。また出土した黒曜石の多くは、北部九州の腰岳産である。このことから、朝鮮半島や北部九州などとの活発な交流が考えられる。

後期の遺跡には、上県町志多留に所在する志多留貝塚がある。この遺跡からは、鐘崎式や北久根山式などの縄文土器、石斧や石錘などの石器が出土している。朝鮮半島系の土器はみられない。

晩期の遺跡には、峰町吉田に所在する吉田遺跡がある。この遺跡からは、縄文土器や石斧などが出土している。晩期の対馬では、同時期の北部九州で確認されるような支石墓は確認されていない。

縄文時代の対馬は、出土遺物から見ると縄文時代中期までは朝鮮半島との交流が活発に行われていたが、縄文時代中期以降は低調化する傾向がある。

弥生時代　対馬の弥生時代では集落遺跡がほとんど見つかっておらず、遺跡の多くは埋葬遺跡である。その埋葬遺跡は湾の周辺に突き出た岬の先端部に立地している。

前期の遺跡には、峰町三根に所在する井手遺跡がある。この遺跡からは、板付式や亀ノ甲式などの弥生土器のほかに、朝鮮半島系の孔列文土器が出土しており、朝鮮半島南部との交流が指摘される。

中期の遺跡には、峰町吉田に所在する恵比須山遺跡がある。この遺跡では、弥生時代中期から古墳時代にかけて築かれた、12基の箱式石棺墓が確認されている。中期の対馬では、箱式石棺墓を主体とする埋葬遺跡が多く見られる。青銅器の副葬品も見られ、広形銅矛などが多量に出土している。

後期の遺跡には、上対馬町古里に所在する塔の首遺跡がある。この遺跡では5基の箱式石棺墓が確認されており、弥生土器や銅矛などの北部九州系の遺物や、朝鮮半島系の遺物が出土している。同時期の他の遺跡からも、北部九州や朝鮮半島の豊富な種類の青銅製品が出土している。

弥生時代の対馬は、副葬品などから北部九州や朝鮮半島との交流がうかがえる。　（安原）

古墳時代　対馬の古墳は、雞知（けち）浦を中心とする一帯に多く築造されている。また古墳以外では、弥生時代から続く箱式石棺墓が対馬の各地に築造されている。

前期の古墳には、上県町志多留に所在する大将軍山古墳がある。この古墳は墳丘が確認されておらず、箱式石棺を主体部としている。副葬品は、土師器、陶質土器、鳳鏡、鉄鏃、玉類が出土している。

中期の古墳には、美津島町雞知に所在する出居塚古墳がある。この古墳は前方後方墳で、対馬最大

の古墳である。古墳の形状や柳葉形銅鏃などの出土遺物から、畿内勢力と結びついていた首長層の古墳と考えられる。

後期の古墳には、美津島町雞知に所在する根曽古墳群がある。この古墳群では、６基の古墳が確認されている。中でも１号墳と２号墳は前方後円墳で、１号墳からは柳葉形鉄鏃や碧玉製管玉、２号墳からは須恵器や鉄刀片が出土している。

終末期の古墳には、厳原町下原に所在する矢立山古墳群がある。この古墳群では３基の方墳が確認されており、主体部は横穴式石室である。副葬品は、須恵器を中心に鐶座金具、銅鋺、刀装具が出土している。

古墳時代の対馬は、古墳や出土遺物から畿内勢力、北部九州、朝鮮半島との積極的な交流が見られる。

古代以降　古代以降の対馬は古代日本と朝鮮半島との交流における要衝としての役割を担った。

飛鳥時代には美津島町黒瀬に所在する金田城がある。遺構として建物跡や城門、石垣が確認されている。金田城は、白村江の戦いの影響により、浅茅湾に面した城山に築かれた朝鮮式山城である。対馬には金田城のほかに防人と烽も設置された。

平安時代になると律令による統制を受け、対馬にも国府が置かれたが、現在国府跡に比定される遺跡は確認されていない。平安時代の集落遺跡では峰町吉田に所在する大田原ヤモト遺跡がある。この遺跡では、貿易陶磁器や製塩土器などが出土している。

中世になると、対馬は交易の中継地としての役割が拡大する。

鎌倉時代は上県町屋敷畑に所在する大石原遺跡がある。この遺跡では、10棟の掘立柱建物跡が検出され、貿易陶磁器や国産土器が出土している。出土遺物の多くは高麗青磁であり、朝鮮半島との活発な交流がうかがえる。

南北朝時代から室町時代にかけては浅茅湾に面する美津島町尾崎に所在する水崎遺跡がある。この遺跡は、朝鮮交易の担い手であった早田氏に関わる遺跡と考えられ、貿易陶磁器が多数出土している。中でも東南アジア産陶器が確認されたことは当時の広範な交易活動を示している。

近世になると、島主宗氏が藩主として力を強め、宗家の管理による朝鮮交易がすすめられ、朝鮮と良好な関係を維持した。この時代の遺跡として厳原町今屋敷に所在する金石城や厳原町桟原に所在する桟原城がある。いずれも宗氏の居城であり、対州窯の陶磁器や朝鮮産陶磁器が多く出土している。

（赤峯）

（２）対馬における遺跡立地の変遷

対馬は南北に山地が走り、山林の面積が全島の約９割を占め、海岸のわずかな平地に多くの集落が営まれている。そのため現代の居住域と遺跡が重複している可能性があり、これまで確認された集落遺跡は少ない。

縄文時代の遺跡の数は少なく、縄文時代の時期ごとの立地の変遷を検討するのは難しい。確認された遺跡は海に面した平地に立地しており、集落遺跡では島外との交流を示す遺物も出土している。

弥生時代には岬の先端や海をのぞむ丘の上に多くの埋葬遺跡が営まれるようになる。埋葬遺跡の多くは箱式石棺墓であり、北部九州でみられる支石墓は対馬では確認されていない。この立地の様相は古墳時代まで続く。貝塚は確認されているが集落遺跡は見つかっていない。中期後半から後期前半にかけては、上島南部の峰町三根地区と豊玉町佐保浦・仁位地区に青銅器を出土する遺跡が集中する。上島北部でも青銅器が副葬された箱式石棺墓は見つかっているが、確認された遺跡数はわずかである。遺跡数、副葬品を考慮すると、三根地区や佐保浦・仁位地区が中心的な地域であったと考えられる。

後期後半から終末期になると三根地区での多量な副葬品は見られなくなる。一方、佐保浦・仁位地区においては副葬品が多量な状態が続き、遺跡分布の中心は佐保浦・仁位地区に移る。その後遺跡の分布が南北に拡大し、後期後半には、下島でも箱式石棺墓が築かれるようになる。浅茅湾岸地域で青銅器を多く出土する箱式石棺墓があり、下島の雞知地区が下島の遺跡分布の中心をなしている。

古墳時代においても埋葬遺跡が多く、立地の様相は弥生時代と変わらない。中期になると、箱式石棺墓と並行して、明瞭な墳丘を持つ積石塚と呼ばれる古墳が築造される。積石塚と同時に雞知地区では前方後円墳もあり、根曽古墳群１号墳はその代表である。後期から終末期になると下島南部において古墳の分布が広がり、下島南岸にも終末期古墳が築造されるようになる。雞知地区は終末期まで古墳が築造され続けており、古墳時代を通して中心的な地域であったと考えられる。

古代になると朝鮮式山城である金田城の築城や国府の設置など下島に中央政権の施設が集中する。特に厳原には、中世には宗氏の居館が、近世には金石城などの城郭が築かれた。厳原は現在に至るまで対馬の中心地となっている。

対馬では弥生時代中期後半以降から、遺跡の立地する場所や集中する地域に傾向がみられるようになる。弥生時代は上島南部に箱式石棺墓が集中する地区があり、そこが対馬の中心的な地域であったが、古墳時代になると下島に多く古墳が築造されており、下島が中心的な地域となる。遺跡の分布からみて対馬の中心地は上島の三根、佐保浦・仁位、下島の雞知、厳原と時代が下るとともに南下する。古代以降は北部九州との交流により下島が中心地となり、その様相は現代まで続く。　（廣重）

参考文献

安楽勉ほか　1988『原始・古代の長崎県』通史編　長崎県教育委員会

小田富士雄ほか編　2002『国史跡矢立山古墳群－保存修理事業に伴う発掘調査－』厳原町文化財調査報告書第７集　福岡大学考古学教室研究室　厳原町教育委員会

甲斐田彰・塩塚浩一編　1996『池ノ浦墳墓－長崎県下県郡美津島町所在－』美津島町文化財調査報告書第７集　美津島町教育委員会

国分直一ほか　1986『えとのす』第30号　新日本教育図書

坂田邦洋　1976「志多留貝塚」『対馬の考古学』縄文文化研究会：pp. 95-179

坂田邦洋　1978『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷出版事業部

坂田邦洋　1979「対馬越高尾崎遺跡における縄文前期文化の研究」『別府大学考古学研究室報告』第３冊　別府大学考古学研究室

副島和明編　1992『長崎県埋蔵文化財調査集報ＸＶ』長崎県文化財調査報告書第104集　長崎県教育委員会

副島和明編　1994『長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第113集　長崎県教育委員会

副島和明・古澤義久・川道寛　2013『韓・日初期新石器文化比較研究』第10回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集　韓国新石器学会

高橋　清　1992「対馬地域」『九州地方』日本の地質９　共立出版株式会社

高野晋司・古門雅高編　1996『大石原遺跡』上県町文化財調査報告書第１集　上県町教育委員会

田中淳也・福田一志・川口洋平　1999『水崎遺跡』美津島町文化財調査報告書第８集　美津島町教育委員会

田中淳也　2011『金田城Ⅳ』対馬市埋蔵文化財調査報告書第６集　対馬市教育委員会

豊玉町教育委員会　1984『イノ際遺跡－対馬町豊玉町佐保浦所在の埋納遺構群－』豊玉町文化財調査報告書第５集

長崎県教育委員会　1974『対馬　浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集

長崎県教育委員会　1994『長崎県遺跡地図－対馬地区－』長崎県文化財調査報告書第118集

東貴之・福田一志編　1998『県内主要遺跡内容確調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第147集　長崎県教育委員会

古澤義久　2014「玄海灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格－弥生時代早期との比較－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第28号

正林　護編　1986『佐賀貝塚（略報）』峰町文化財調査報告書第８集　峰町教育委員会

水野清一編　1953『對馬』東方考古學叢刊　乙種第六冊　東亞考古學會

宮本一夫編　2004『対馬吉田遺跡－縄文時代遺跡の発掘調査－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

二　越高遺跡Ｂ地点の調査

１．調査経過

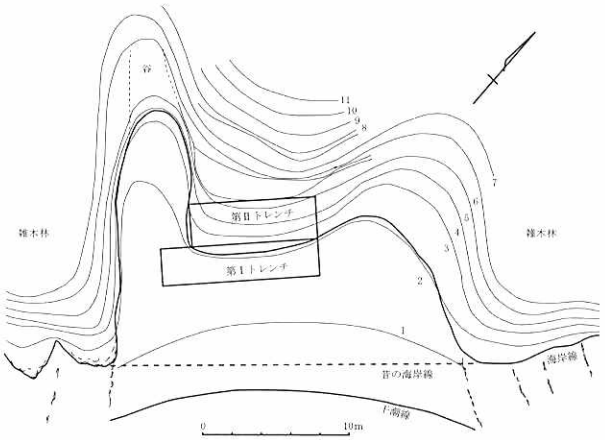
（１）既往の調査（第１次調査～第４次調査）（第３～５図）

第１次調査は、越高遺跡Ｂ地点を対象として 1976 年 12 月 11 日～ 17 日にかけて行われた（坂田 1978）。調査主体は上県町教育委員会と長崎大学医学部解剖学第二教室である。調査区は海岸部崖面の前に第Ⅰトレンチ、傾斜地に第Ⅱトレンチとしてそれぞれ設定された。第Ⅱトレンチでは、地表下１～３ｍにかけて良好な遺物包含層が確認された。また報告書によれば、出土層位・地点ともに不明であるが、墓壙が２基確認された。その墓壙からはそれぞれ副葬されたと思われる土器が１点ずつと人骨が出土したと報告されている。

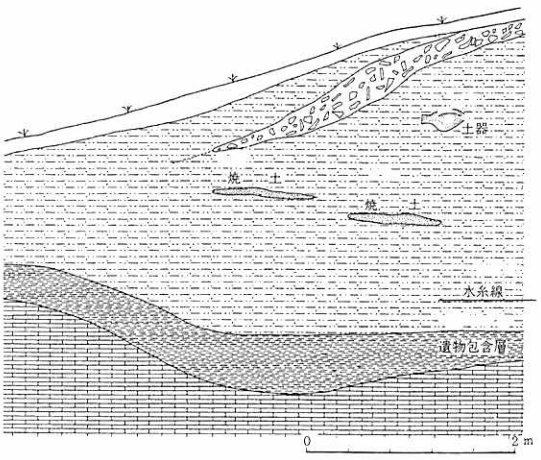
この調査では、縄文土器が７点、韓国新石器時代の土器が 2641 点出土した。石器は、遺物包含層から縄文時代早期末のものが、剥片を含め 226 点出土した。石器の種類は、石鏃や石槍などの狩猟・漁撈具、石匙や削器などの加工具のほか、石斧、石核などが出土している。石材には、黒曜石、頁岩、砂岩が使われており、黒曜石に関しては、腰岳産と思われるのものが多く確認された。

第２次調査は、越高遺跡Ａ地点を対象として 1978 年７月 16 日～ 22 日にかけて行われた（坂田 1979）。調査主体は上県町教育委員会であり、調査目的は韓国の隆起文土器の編年をより確かにすることであった。調査の結果、縄文時代早期から前期とされている６枚の遺物包含層が確認された。以下は各層の土器の型式である（古澤 2014）。

各層　　土器型式
第１層　西唐津式・曽畑式
第２層　轟Ｂ式・西唐津式・曽畑式・隆起文土器
第３層　轟Ｂ式・西唐津式
第４層　塞ノ神式・轟Ｂ式・隆起文土器
第５層　隆起文土器・沈線文土器
第６層　貝殻条痕土器・隆起文土器



第３図　第１次調査　調査区位置図（坂田 1978）

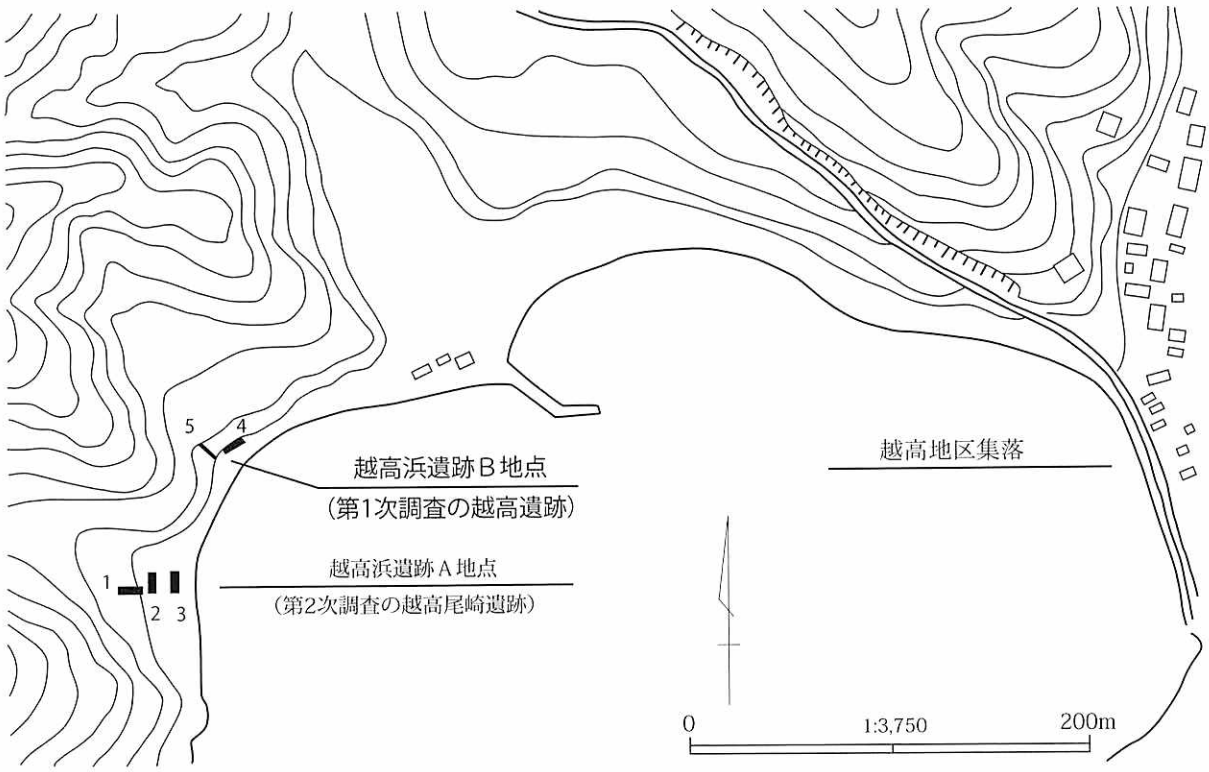


第４図　第１次調査　土層断面図（坂田 1978）

上層では縄文土器が、下層では隆起文土器が主体的に出土しており、縄文土器と隆起文土器との並行関係が判明した。石器は、全層位で削器や掻器などが出土しており、黒曜石製のものは腰岳産や壱岐産と推定されている。また報告書では、礫が円形に配置された床面が焼けた炉址とされる遺構が、第２層で２基、第４層で１基確認できたとされている。いずれも出土地点は不明である。

第３次調査は、越高遺跡Ａ・Ｂ地点を対象として 1996 年８月 26 日～９月 13 日にかけて行われた（東・福田編 1998）。調査主体は長崎県教育庁文化課であり、調査の目的は、海水の侵食により消滅しつつある遺跡全体の範囲確認であった。調査区はＡ地点に３箇所、Ｂ地点に２箇所設定された。明確な分層はされていないが、第３調査区から第５調査区において韓国新石器時代の遺物の出土が確認されている。第３・４調査区では、隆起文土器、沈線文土器が、第３調査区では、頁岩製のスクレイパー、黒曜石の剥片および石核、砂岩製の磨石も確認されている。第５調査区では、隆起文土器、沈線文土器が出土し、沈線文を伴う壺も確認された。

第４次調査は、越高遺跡Ａ・Ｂ地点を対象とし、2015 年８月 16 日～ 24 日にかけて行われた（山元編 2016）。調査主体は熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会である。調査目的は縄文時代早期末から前期前葉にかけての日韓交流の解明であり、遺物包含層の堆積状況の把握と遺跡保護に向けて遺跡範囲の確認が行われた。調査区は、Ａ・Ｂ両地点の海岸部と谷部の崖面に１箇所ずつ計４箇所設定された。Ａ地点では、海岸部調査区において第２次調査と概ね一致する土層堆積状況が確認されたが、遺物の出土はなく、各層の時期比定は困難とされた。谷部調査区においては隆起文土器や石器を含む遺物包含層が確認されたため、遺跡の範囲は北西部に広がる可能性が高まった。Ｂ地点では、海岸部調査区と谷部調査区に複数の遺物包含層が確認された。特に第６層においては隆起文土器を含む遺物が多数出土した。第６層は第１次調査における遺物包含層と推定されたが、第１次調査で検出された遺物包含層直下の岩盤層は、第６層下には検出されなかった。（三浦）



第５図　第３次調査　調査区位置図（東・福田編 1998 を一部改変）

（２）今回の調査（第５次調査）

調査は越高遺跡Ｂ地点のみを対象に、2016 年９月 11 日～ 22 日の 12 日間実施した。調査の主な目的は、第４次調査で不明瞭であった層序の把握、第１次調査において遺物包含層直下より検出されたとされる岩盤層の確認である。第５次調査では発掘調査と測量調査を実施した。

発掘調査は海岸部崖面と谷部崖面を主に掘削した。位置は第４次調査で設定された調査区と概ね同一地点である。発掘調査では、漂着物が混じる現地表面を除去した後、崖面と現地表面下の調査を行った。遺物の出土に際しては、トータルステーションを用いて位置情報の記録を行った。掘削で生じた排土は乾燥ふるい選別法によってふるいをかけ、遺物を回収した。

局地座標は、第４次調査の K1 を KT16-01 と改称し、KT16-01 を（０，０）とし、北にＸ軸、西にＹ軸をそれぞれ伸ばした（第１表）。測量調査の調査範囲は、崖面発掘調査区上部の斜面および段畑として利用されていた平坦部の一部である（第７図）。調査は、水準器とトータルステーションを用いた変化点測量法によって行った。調査の結果、これまで測量図が作られていなかった調査区北西の斜面の様相を把握することができた。本調査では、斜面の上側の平坦部の一部が未測量のため、今後はさらに測量範囲を広げる予定である。

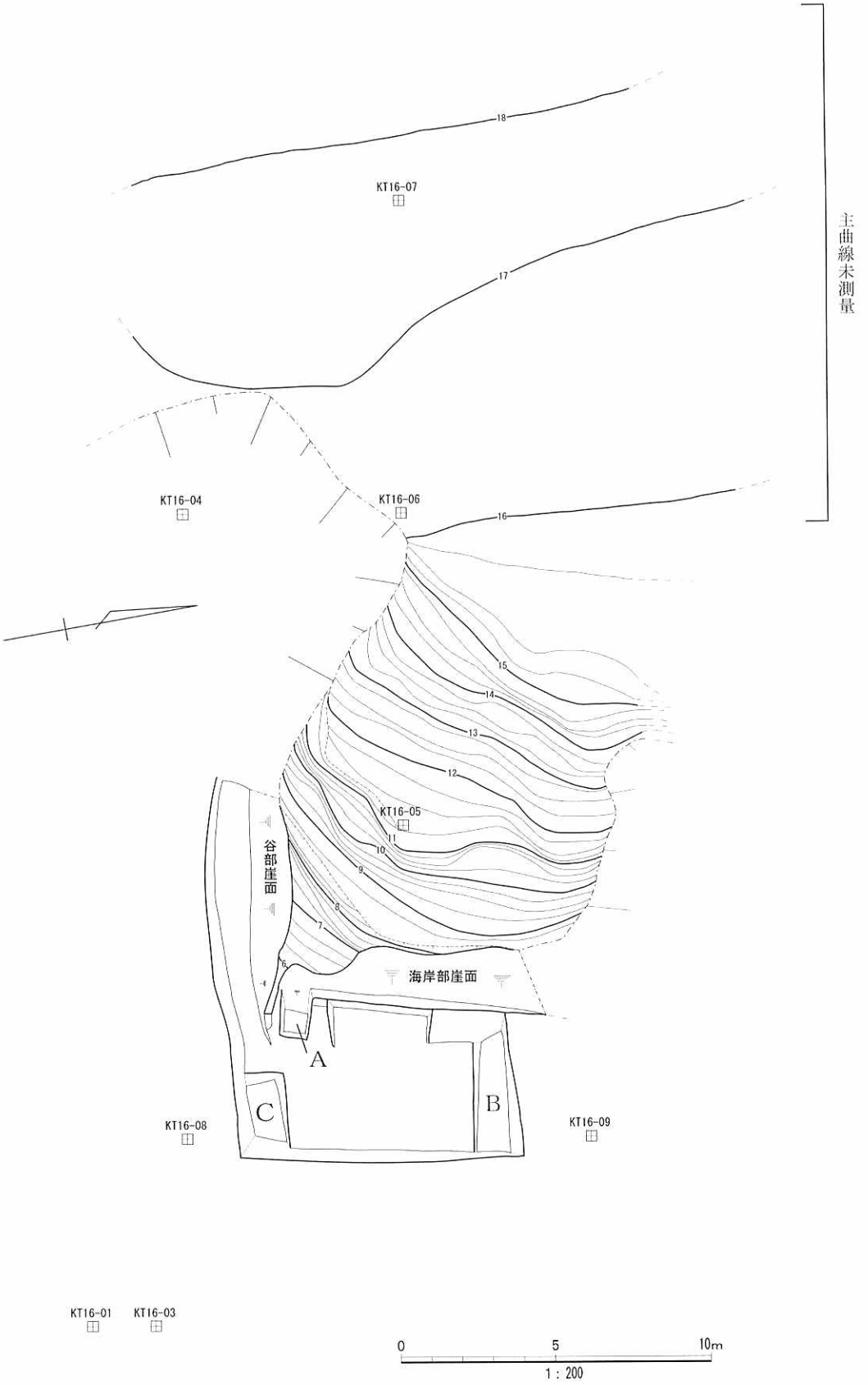
調査終了後、波などの侵食から崖面を一時的に保護するため、不織布を崖面に貼り付けた（第６図）。

（古賀）

第１表　越高遺跡Ｂ地点基準点座標一覧（局地座標）

基準点名	Ｘ座標（m）	Ｙ座標（m）	Ｚ座標（m）	備考
KT16-01	0.000	0.000	2.784	K1 を改称
KT16-02	0.000	32.570	4.044	
KT16-03	0.000	2.000	2.714	台風の影響で消失
KT16-04	26.000	3.000	—	
KT16-05	16.000	10.000	11.387	
KT16-06	26.000	10.000	16.288	
KT16-07	36.000	10.000	—	
KT16-08	6.000	3.000	4.405	
KT16-09	6.000	16.000	3.618	

第６図　崖面不織布貼付状況（南東から）



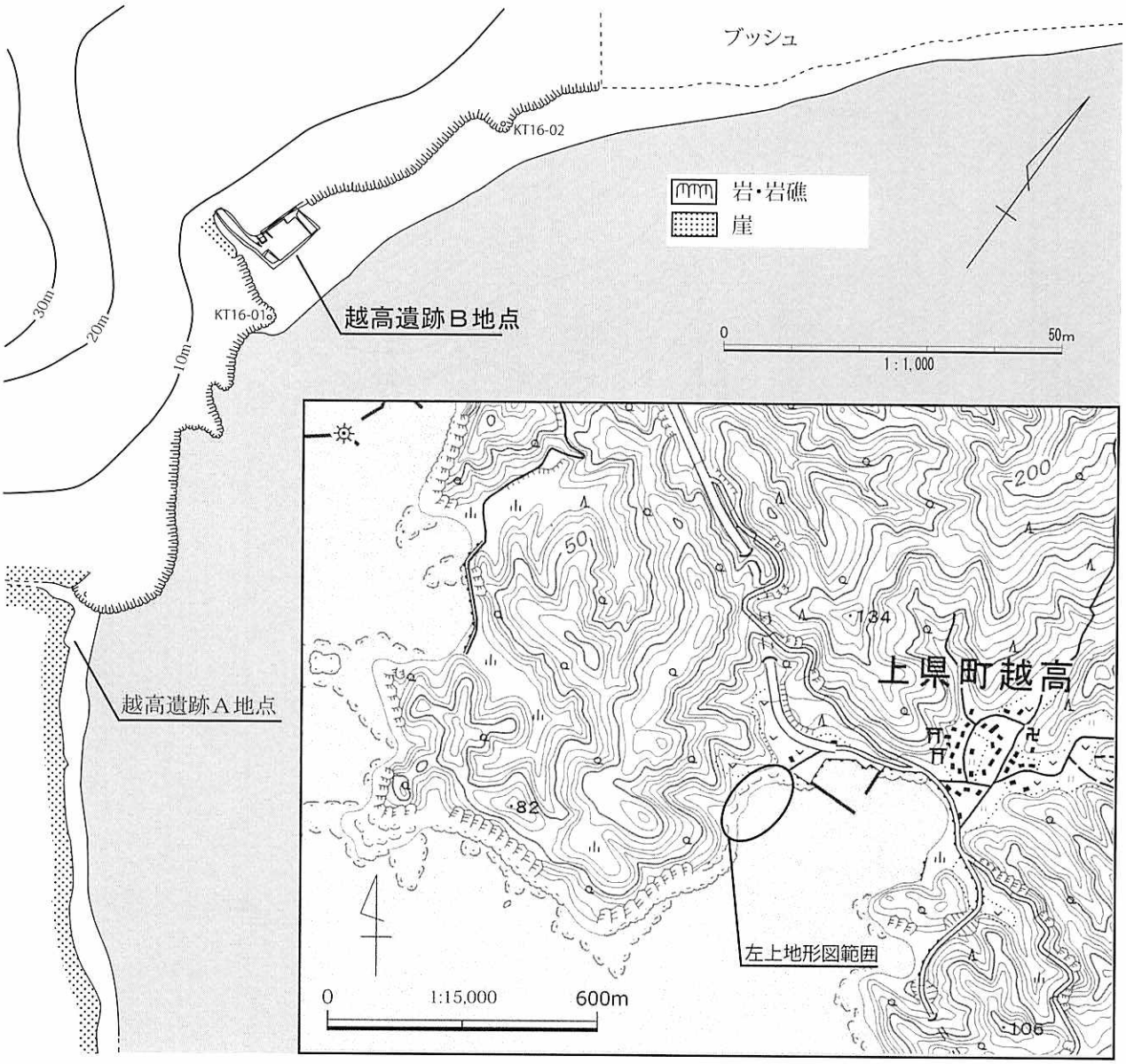
第７図　地形測量図および調査区平面図

２．調査の概要

（１）調査区の設定（第７・８図）

Ｂ地点には土層がむき出しの崖面が存在しており、崖面の土層中には遺物が包含されている。調査区は、海岸部・谷部崖面（以下、海岸部・谷部）とトレンチを設定した。海岸部・谷部とも現地表面には漂着物が大量に混じっており、それらを除去するために現地表面を掘削した後、発掘調査を行った。発掘調査は主に露出した崖面を削り、精査を行った。またトレンチは、第１次調査の第Ⅱトレンチで検出された岩盤層を確認するために３箇所設けた。１つ目のトレンチは海岸部下南側に設け、南北0.8ｍ、東西1.2ｍである（A）。２つ目のトレンチは海岸部下北側に設け、南北0.9ｍ、東西4.0ｍである（B）。３つ目のトレンチは谷部東側に設け、南北1.5ｍ、東西2.5ｍである（C）。トレンチ（A）は第４次調査の海岸部トレンチと同一地点である。トレンチ（A）は、遺物や土層を確認しつつ人力で掘削した。以下では、トレンチ（A）のみ海岸部と合わせて報告する。

海岸部は、第４次調査と同一地点である。掘削範囲は第４次調査より拡大し、南北7.4ｍ、高さ5.2



第８図　越高遺跡Ｂ地点調査区位置図

mであり、30cmほど掘削した。

谷部は、第４次調査と同一地点である。掘削範囲は第４次調査より拡大し、東西11.1ｍ、高さ6.0ｍであり、30cmほど掘削した。（佐々木・稗田）

（２）遺跡の層序（第９・10図）

本調査では海岸部と谷部の層序に対応関係がみられ、谷部の層序を基本として海岸部はそれに準拠した。本調査では５枚の堆積層を確認することができた。第２層は谷部では確認できたが、海岸部では確認できなかった。各層中には、対州層群が風化してできたと考えられる細長い頁岩の礫が多く含まれている。

第１層は表土である。層の厚さは約0.2～1.8ｍである。礫は含まない。しまりは悪い。木の根が混じる。

第２層は厚さ約0.7～0.8ｍの褐色の礫層である。礫は、大きさ約２～３cmで、大礫を含んでいる。しまりは悪い。遺物は出土しなかった。調査区西側段畑の盛土の可能性がある。谷部でのみ確認できた。

第３層は褐色の礫層である。層の厚さは約0.6～2.4ｍである。礫は、大きさ約２～３cmで、層の下端に礫が集中している。しまりは良い。海岸部では、第４次調査の際に第３層内で分層が行われていたが、本調査では分層していない。

第４層は明褐色の砂礫層である。層の厚さは約0.6～1.2ｍである。礫は、大きさ約２～３cmである。円礫と大礫を含んでおり、大礫は層中の上端と下端にみられる。しまりは良い。海岸部の第４層には、黒褐色の砂利層が縞状に混じる。縞状に混じる砂利層は第４層が波によって削られ、そこに土砂が堆積したものと思われる。

第５層は褐色の礫層である。層の厚さは約0.2～0.8ｍであるが、下限は不明である。礫は、大きさ約５cmほどである。しまりは悪い。

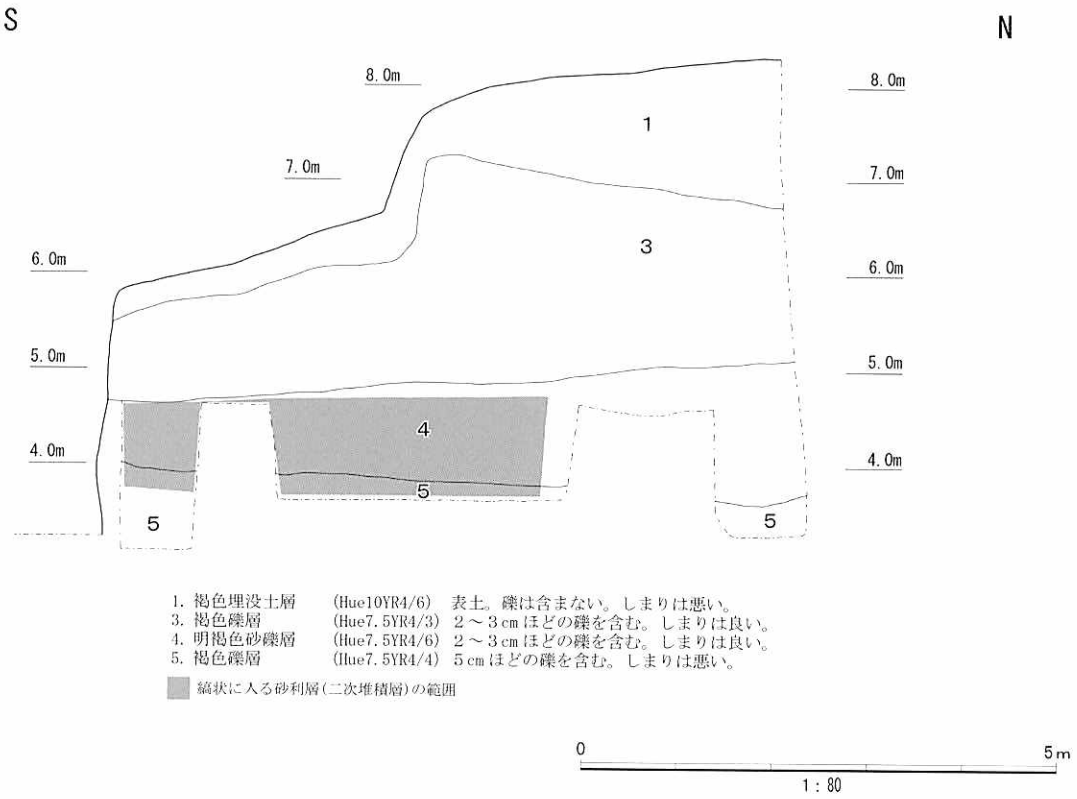
なおトレンチ（B）・（C）は、調査期間中の豪雨により埋没したため土層断面図を描画できなかった。トレンチ（B）・（C）は、崖面との比較から現地表面の掘削後、第４層下部に相当する層が露出していたと考えられる。その後さらに掘削を継続し、いずれのトレンチも第４層下部から第５層を掘りぬき、第５層下部まで掘削したと考えられる。トレンチ（B）・（C）で確認した範囲では、第５層から遺物は出土しなかった。また、第１次調査の第Ⅱトレンチで検出したとされた岩盤層に相当する層は確認できなかった。（佐々木・稗田）

（３）遺物出土状況

遺物は第３～５層で出土した。本調査は、海岸部・谷部ともに第４次調査より掘削範囲を拡大したため、多くの遺物が出土した。出土した遺物は土器、石器、炭化物である。位置関係から本調査の第４層が第４次調査の第６層に相当する。第５層からも遺物は出土しているが、数は少ない。第５層から出土した遺物の多くは、第４層直下から出土しており第４層からの混入の可能性がある。そのため、第５層を遺物包含層とする判断は保留としたい。

海岸部では、遺物が第３～５層ともに崖面の北側から集中して出土した。第３層からは、土器29点、石器５点、炭化物９点が出土した。第４層からは、土器43点、石器３点、炭化物10点出土したが、一部は崖面に貼りついた二次堆積層の遺物である。第５層からは、土器２点、炭化物３点が出土した。

谷部では、遺物が第３層は崖面の西側から、第４層は崖面の東側から集中して出土した。第３層から土器35点、石器１点、炭化物10点が出土した。第４層からは、土器81点、石器10点、炭化物51点が出土した。第５層からは、土器３点、炭化物１点が出土した。（佐々木・稗田）

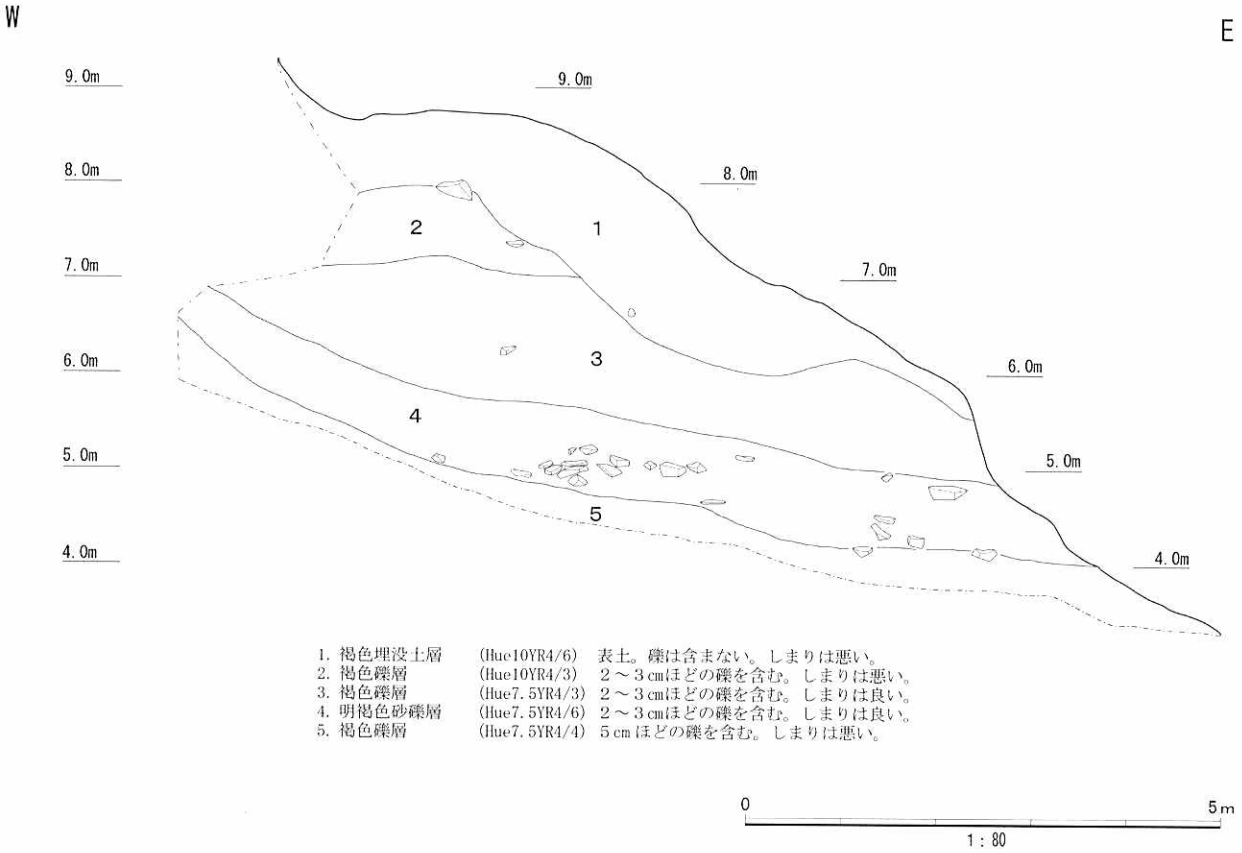


1. 褐色埋没土層　(Hue10YR4/6)　表土。礫は含まない。しまりは悪い。
3. 褐色礫層　(Hue7.5YR4/3)　2～3cmほどの礫を含む。しまりは良い。
4. 明褐色砂礫層　(Hue7.5YR4/6)　2～3cmほどの礫を含む。しまりは良い。
5. 褐色礫層　(Hue7.5YR4/4)　5cmほどの礫を含む。しまりは悪い。

縞状に入る砂利層(二次堆積層)の範囲

0　5m
1：80

第９図　海岸部土層断面図



1. 褐色埋没土層　(Hue10YR4/6)　表土。礫は含まない。しまりは悪い。
2. 褐色礫層　(Hue10YR4/3)　2～3cmほどの礫を含む。しまりは悪い。
3. 褐色礫層　(Hue7.5YR4/3)　2～3cmほどの礫を含む。しまりは良い。
4. 明褐色砂礫層　(Hue7.5YR4/6)　2～3cmほどの礫を含む。しまりは良い。
5. 褐色礫層　(Hue7.5YR4/4)　5cmほどの礫を含む。しまりは悪い。

0　5m
1：80

第 10 図　谷部土層断面図

3．出土遺物

（1）**土器**（第11～16図、第2・3表）

本調査では総計291点の土器が出土した。今回図示した資料は96点である。全ての土器が朝鮮半島系の特徴を有する土器である。その多くが朝鮮半島南海岸地域で出土している隆起文土器である。一部丹塗磨研土器が出土しており、朝鮮半島東海岸地域の土器である可能性がある。

ここで「隆起文土器」の名称について整理しておきたい。粘土を貼り付け、その粘土に指や爪、工具などで刻目が等間隔に施されている土器を「隆帯文土器」と呼ぶ。粘土を貼り付け、その粘土に刻目が施されていない土器を「隆起線文土器」と呼ぶ。外面に隆帯文、隆起線文、刺突文や豆粒文、沈線文など複数の文様が施されている土器を「複合隆起文土器」と呼ぶ。これらを総称して「隆起文土器」と呼称する。

本調査では、出土した隆起文土器をⅠ～Ⅳ類に分類した。隆帯文は刻目の施文方法によって区別し、指による施文をA、工具による施文をBと呼称する。Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類土器は文様構成をもとに細分した（a～c）。aは平行文、bは横帯内を区画したもの、cはその区画の内部を充填施文あるいは横帯内を充填施文したものとする。

Ⅰ類土器（隆帯文土器）　Ⅰ類土器は42点図示している。層位別にみてみると第5層1点、第4層23点、第3層4点、ふるいによる採集と表面採集（以下、層位不明）が14点である。

施文方法Aと施文方法Bは口縁部に対して平行な隆帯文が口縁部から胴部にかけて1～数条施文されているのを基本とする。一部の資料には、その隆帯文の下部に斜位の隆帯文が施文される資料も存在する。

施文方法Aのうち細分可能なものは、46（第5層）、4、6、7、13、55、56、57、58、68（第4層）、14（第3層）である。

4、6、7、14、46、56は隆帯文が2条確認できる。4は口縁部に対して平行ではなく斜位に施文されている。14は隆帯文間の幅が46、56に比べると広い。56は隆帯文間の幅が比較的狭い。文様構成はいずれもaである。

13、57、58は隆帯文が3条確認できる。13は摩滅が激しいが、施文方法Aの可能性が高いと判断した。57、58は隆帯文間の幅が13と比べると狭い。文様構成はいずれもaである。

68は隆帯文で横帯区画した後、その内部を山形文によって小区画している。文様構成はbである。口縁部から胴部まで直立しており、このような器形は朝鮮半島南海岸地域ではあまりみられない。

55は内外面に条痕が確認できる。この特徴は他の出土土器にはみられない。文様構成による細分はできない。

66（第4層）は文様構成による細分はできない。外面に赤色顔料の痕跡を確認できるが、摩滅が激しく詳細は不明である。同一地点から朝鮮半島東海岸系土器の丹塗磨研土器が出土している。

施文方法Bのうち細分可能なものは、54、69（第4層）である。

54は隆帯文が2条確認でき、隆帯文間の幅は13と比べると狭い。文様構成はaである。

69は口縁部に対して平行な隆帯文が1条施文されており、その下部に曲線文のような文様が施文されているが、摩滅が激しく不明瞭である。文様構成はbである。口縁部は楕円状であり、このような例は朝鮮半島南海岸地域では見られない形状をしている。

Ⅱ類土器（隆起線文土器）　Ⅱ類土器は19点図示している。層位別にみてみると第4層4点、第3

層８点、層位不明７点である。Ⅱ類土器は、口縁部に対して平行に施文される土器や横帯区画しその内部を充填施文される土器など、Ⅰ類土器と比べて文様構成が多様である。細分可能なものは、60、62（第４層）、18、19、20、73（第３層）、40、93（層位不明）である。

60は口縁部に対して平行な隆起線文が２条施文されている。文様構成はａである。

62は口縁部に対して平行な隆起線文が３条施文されている。文様構成はａである。

18は口縁部に対して平行な隆起線文が１条施文され、その上部に縦位の隆起線文が施文されている。文様構成はｃである。

19、40は全体の文様構成は確認できないが、隆起線文が充填施文されている。文様構成はｃである。

20は口縁部に対して平行な隆起線文が１条施文され、その下部に隆起線文が充填施文されている。内面には条痕が残されている。文様構成はｃである。

73は口縁部に対して平行な隆起線文が１条施文され、その下部に山形状の隆起線文が施文されている。文様構成はｂである。

93は口縁部に対して平行な隆起線文が１条施文され、その下部に多条の隆起線文が斜位に施文されている。文様構成はｃである。

Ⅲ類土器（複合隆起文土器）　Ⅲ類土器は10点図示している。層位別にみてみると第４層２点、第３層４点、層位不明４点である。隆帯文は隆起線文、沈線文、刺突文と複合しており、隆起線文は豆粒文（日本でいう「豆粒文」ではなく、韓国の「豆粒文」のことを示す）、沈線文と複合している。文様が確認できるものは、９、63（第４層）、21、22、76、77（第３層）、45、92（層位不明）である。

９、22、76は隆帯文と隆起線文が施文されている。施文方法Ａの隆帯文が口縁部に対して１条施文されている。22は隆帯文の下部に隆起線文が隆帯文に対して平行に１条施文されている。文様構成はａである。９、76は隆帯文の下部に多条の隆起線文が斜位に施文されている。文様構成はｃである。

45は隆帯文と沈線文が施文されている。施文方法Ｂの隆帯文が口縁部に対して平行に１条施文されている。その下部に幅広の粘土が貼り付けられ、沈線文が格子状に施されている。このような施文は、朝鮮半島南海岸地域ではみられない。文様構成はａである。

63は隆帯文と刺突文が施文されている。施文方法Ａの隆帯文が口縁部に対して平行に１条施文されている。その上部に工具による刺突文が隆帯文に沿って施文されている。文様構成はａである。

21は隆起線文と豆粒文が施文されている。口縁部に対して平行な隆起線文が１条施されている。その下部には豆粒文と多条な縦位隆起線文が施文されている。文様構成はｃである。

77、92は隆起線文と沈線文が施文されている。口縁部に対して平行な隆起線文が１条施されている。その下部に沈線文が縦位に施されている。文様構成はｃである。

Ⅳ類土器（沈線文のみを有する土器）　Ⅳ類土器は５点図示している。層位別に見てみると、第４層１点、第３層２点、層位不明２点である。

44（層位不明）は格子状に沈線文が施され、内面には条痕が残されている。

この他にも、分類の対象としていないが、底部と把手付土器の把手部分も出土している。

底部　底部は12点図示している。全て平底で上げ底である。

把手　96は把手付土器の把手部分である。残存部位がわずかであり、詳細は不明である。

以上が本調査で出土した土器である。出土土器の多くは器面全体をナデ調整後に、隆起文を貼り付け、貼り付けた部分をナデや工具を用いて最終調整されている（古澤義久のご教示による）。

土器の胎土は、第三章の鐘ヶ江賢二の分析に基づいて肉眼で観察を行った。出土層位が判明してい

る187点を観察し、Aは133点、Bは49点である。

本調査で出土した土器を分類ごとに、河仁秀（Ha Insu）の編年（2012a）と照合した。その結果、Ⅰ類土器施文方法Aは東三洞（トンサムドン）1型～細竹（セジュク）型、Ⅰ類土器施文方法B、Ⅱ類土器、Ⅲ類土器は細竹型～東三洞2型にあてはまる。Ⅳ類土器は細片であるため照合することができなかったが、朝鮮半島の飛鳳里（ピボンリ）貝塚に類例がみられる。（新垣）

第2表　出土土器分類表

分類	施文法	複合施文法	隆帯文の施文方法		文様構成		
			A	B	a	b	c
Ⅰ類	隆帯文	－	○	－	○	○	－
	隆帯文	－	－	○	○	○	－
Ⅱ類	隆起線文	－	－	－	○	○	○
Ⅲ類	隆帯文	隆起線文	○	－	－	－	○
	隆帯文	沈線文	－	○	－	－	○
	隆帯文	刺突文	○	－	○	－	－
	隆起線文	豆粒文	－	－	－	－	○
	隆起線文	沈線文	－	－	－	－	○
Ⅳ類	－	－	－	－	－	－	－

（2）石器（第17・18図、第4表）

本調査では38点の石器が出土した。海岸部では、第4層3点、第3層5点、層位不明14点であり、谷部では、第4層10点、第3層1点、層位不明5点である。黒曜石製の石器が多く出土しており、剝片、砕片を含めて24点と高い割合を占める。以下図示した遺物について述べる。

石鏃　1～4は黒曜石製の石鏃である。1は黒曜石製で、自然面を残す。小型で、基部と一側縁を中心に細かい調整を施している。2は灰白色の横長剝片を素材とし、比較的大きい剝離で整形している。主要剝離面と調整剝離の間で風化具合に差が見られる。3は海岸部第3層出土、全体的に押圧剝離を施し、特に先端部では細かい調整が見られる。他の石器と比較して風化が進んでいる。4は谷部第4層出土、黒曜石製の石鏃で、両面に細かい調整が見られる。上半部と端部の一部が欠損している。

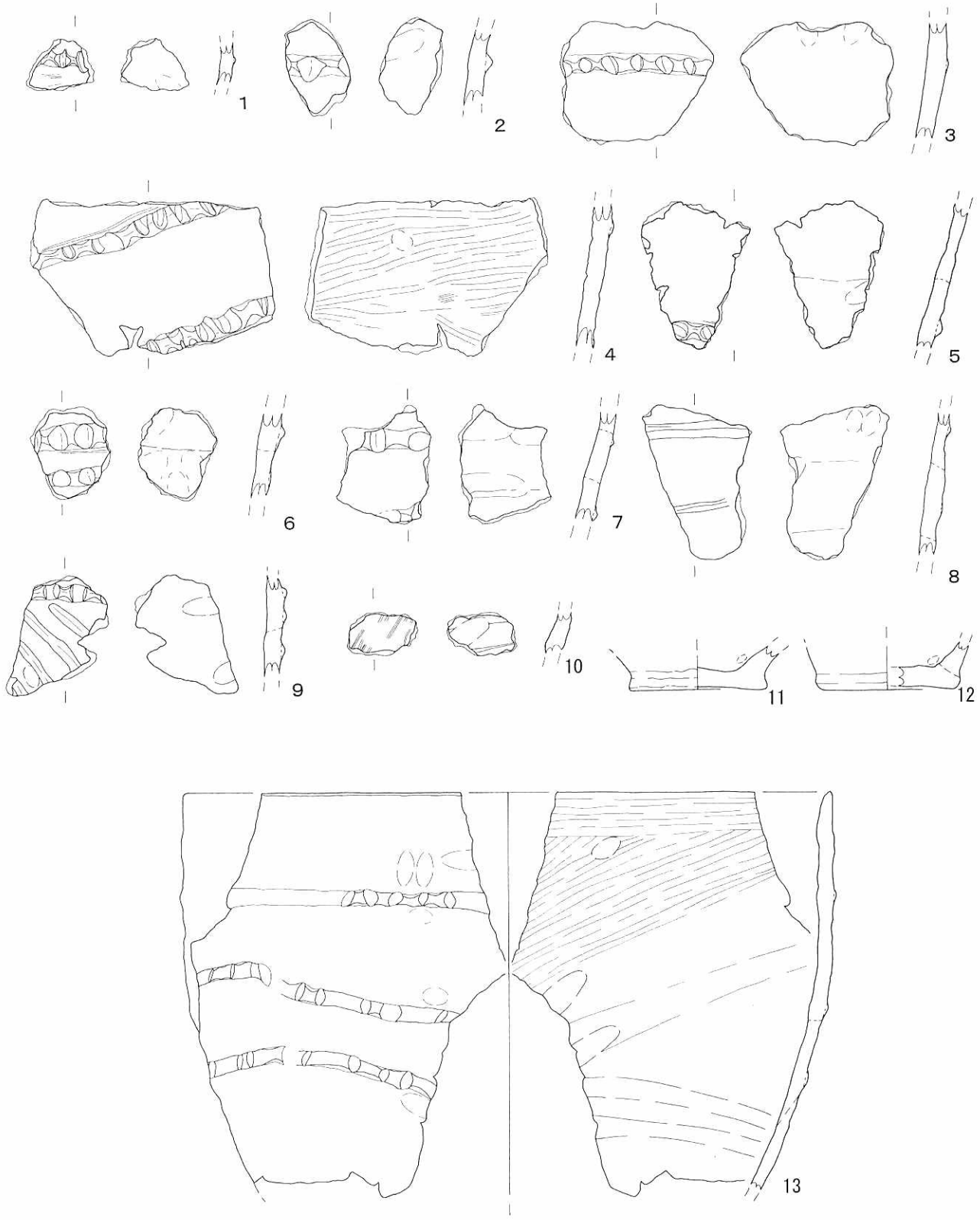
スクレイパー　5～8はスクレイパーである。5は谷部の第4層から出土した。頁岩製の幅の広い横長剝片素材を使用し、下半部を両面から粗く剝離して刃部を形成している。6は安山岩製の横長剝片素材を使用し、主要剝離面の打点を消すように一側縁を粗く加工し刃部を形成している。7は谷部第4層出土、黒曜石製のやや幅の狭い横長剝片素材を使用し、裏面は自然面を多く残す。打点を消すように急角度の剝離を施している。右下半部に大きい剝離を施し、刃部を形成している。8は海岸部第3層出土、黒曜石製の不定形剝片を素材とする。下部及び左側縁に粗い剝離を施して刃部を形成している。

砥石　9は砂岩製の砥石で、使用面は研磨され窪んでいる。一部が欠損している。

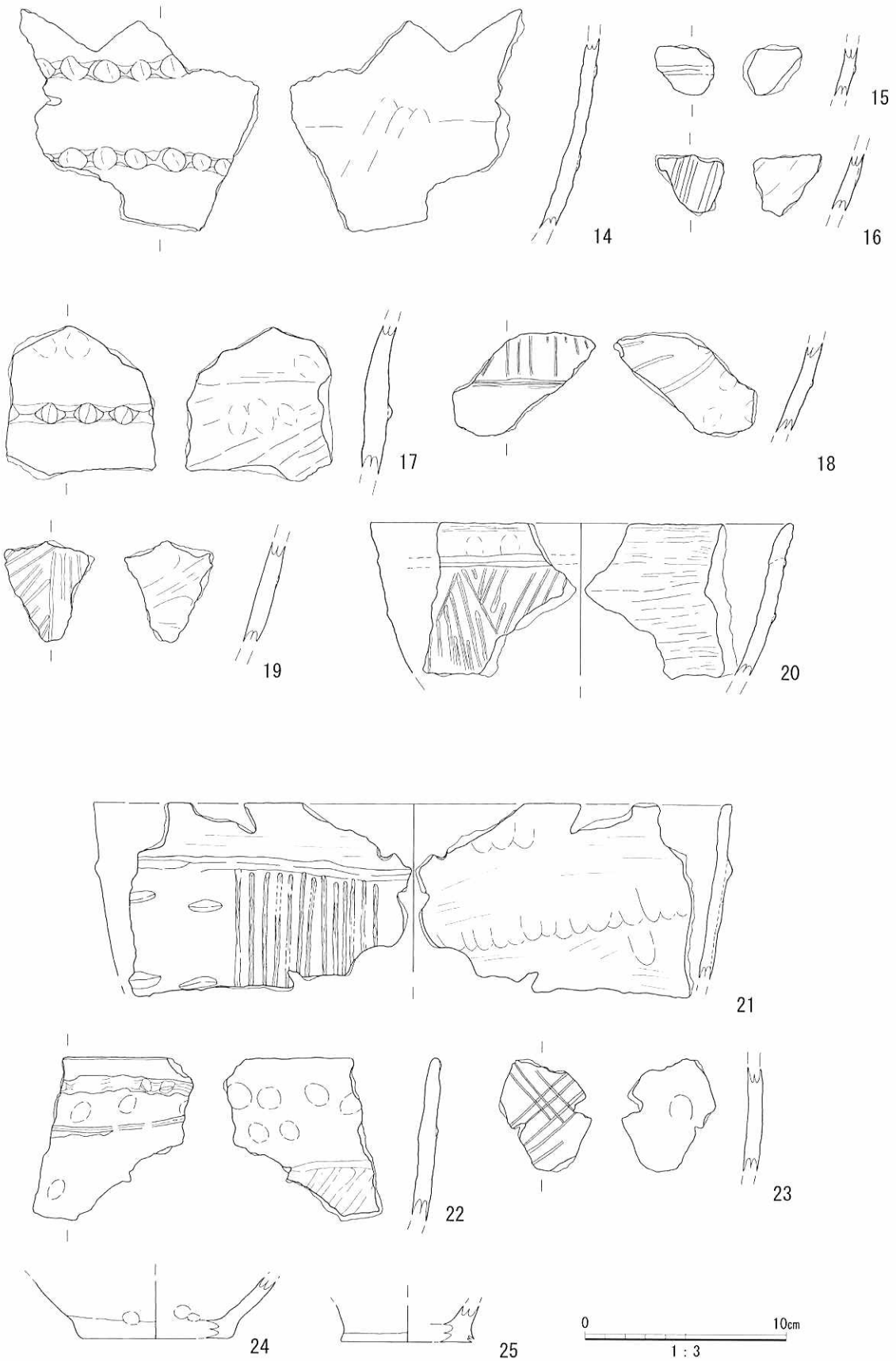
敲石　10は砂岩製の敲石である。両面の中央部及び両側縁に使用痕が見られる。11は頁岩製の敲石である。石材は遺跡周辺の海岸に見られる石材に類似している。長辺の両端に使用痕が見られる。12は敲石である。表面が滑らかでほぼ球形を呈している。朝鮮半島で、類似した形状の敲石が報告されている。（嘉戸）

（3）その他

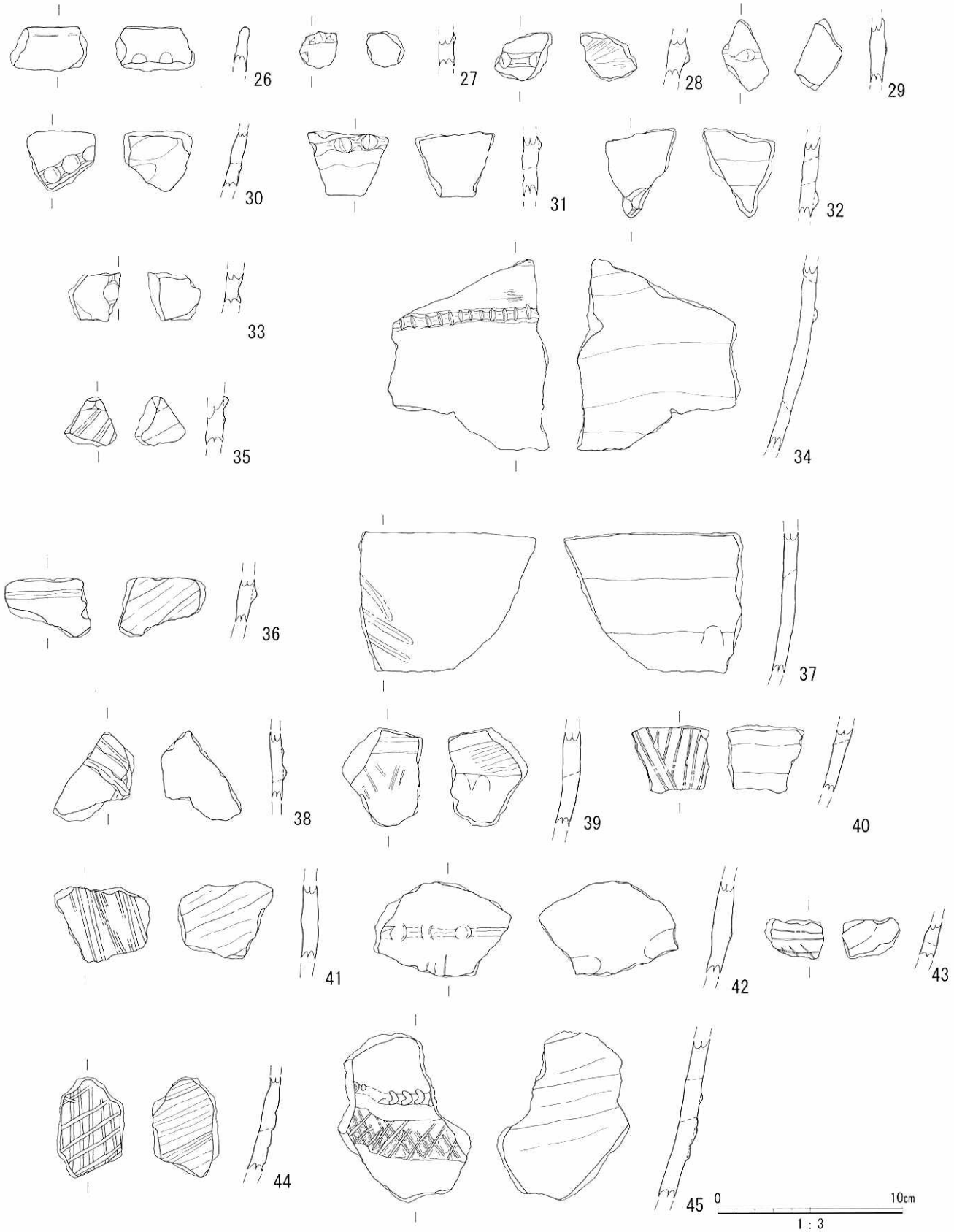
本調査では、炭化物が海岸部で22点、谷部で62点出土した。なお、谷部第3層と谷部第4層出土の炭化物に関して放射性炭素年代（AMS法）を用いて分析を行った。また、谷部第1層で拳大のパミスが1点出土した。（嘉戸）



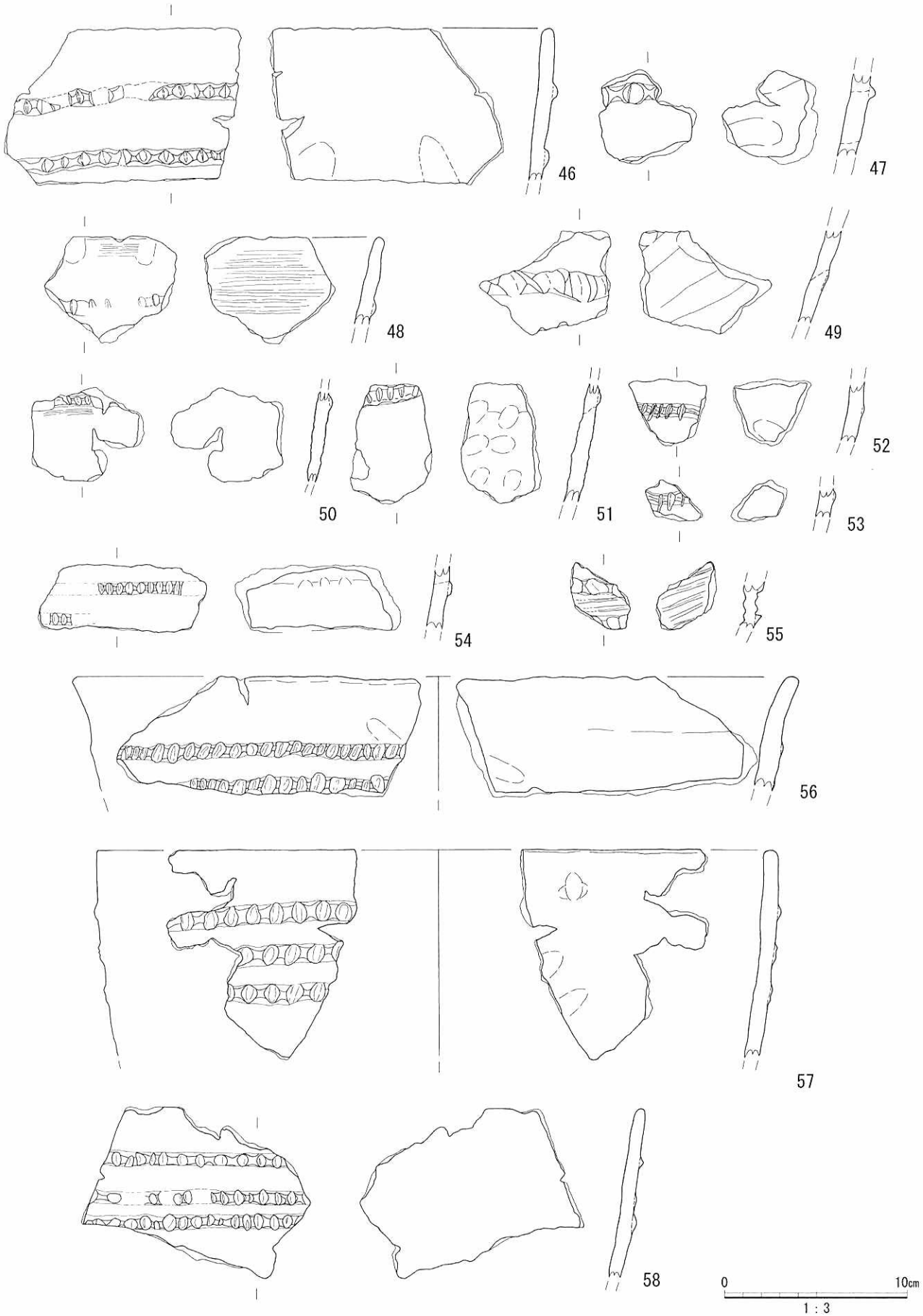
第 11 図　出土土器実測図（海岸部第４層）



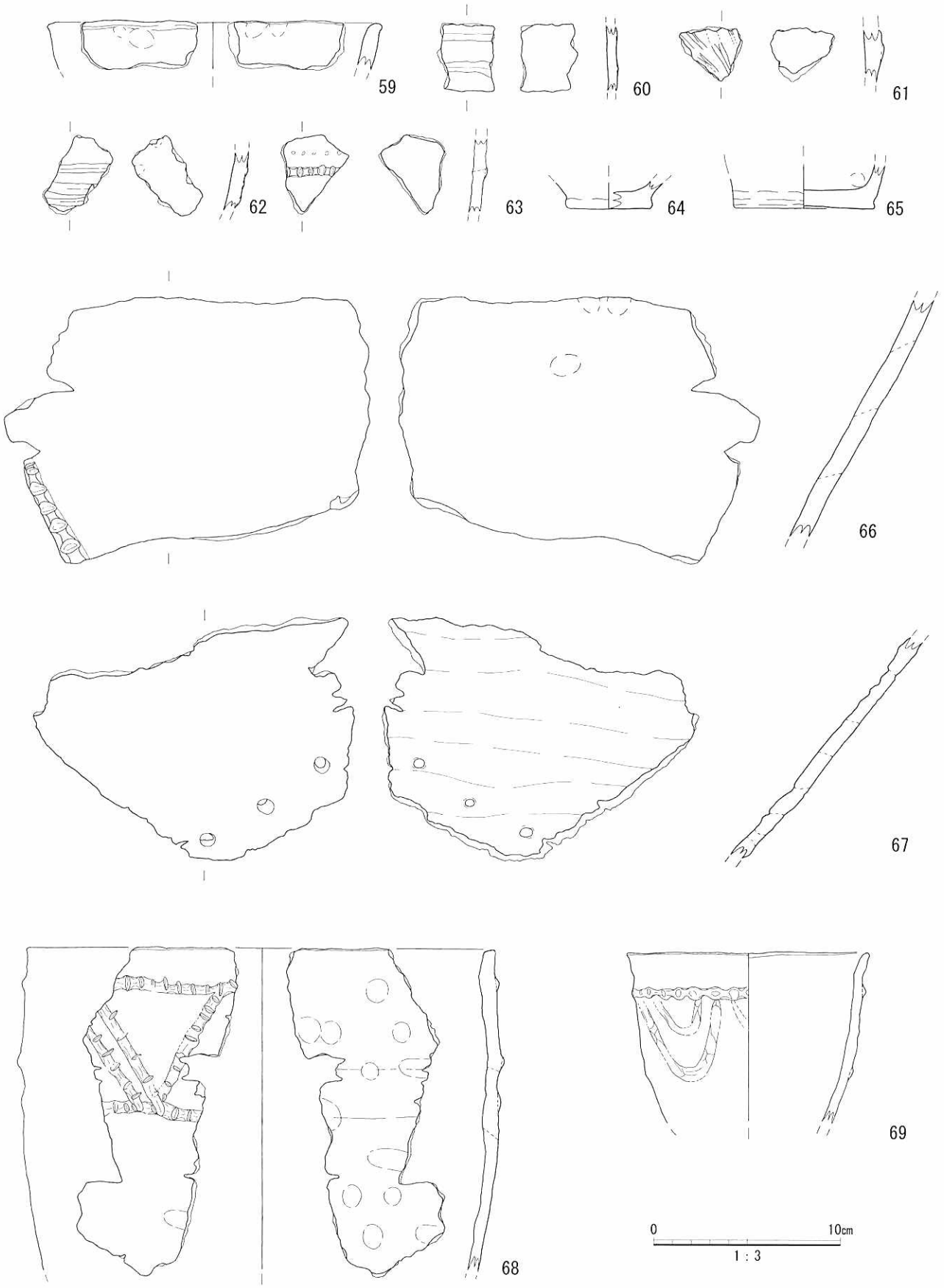
第 12 図　出土土器実測図（海岸部第 3 層）



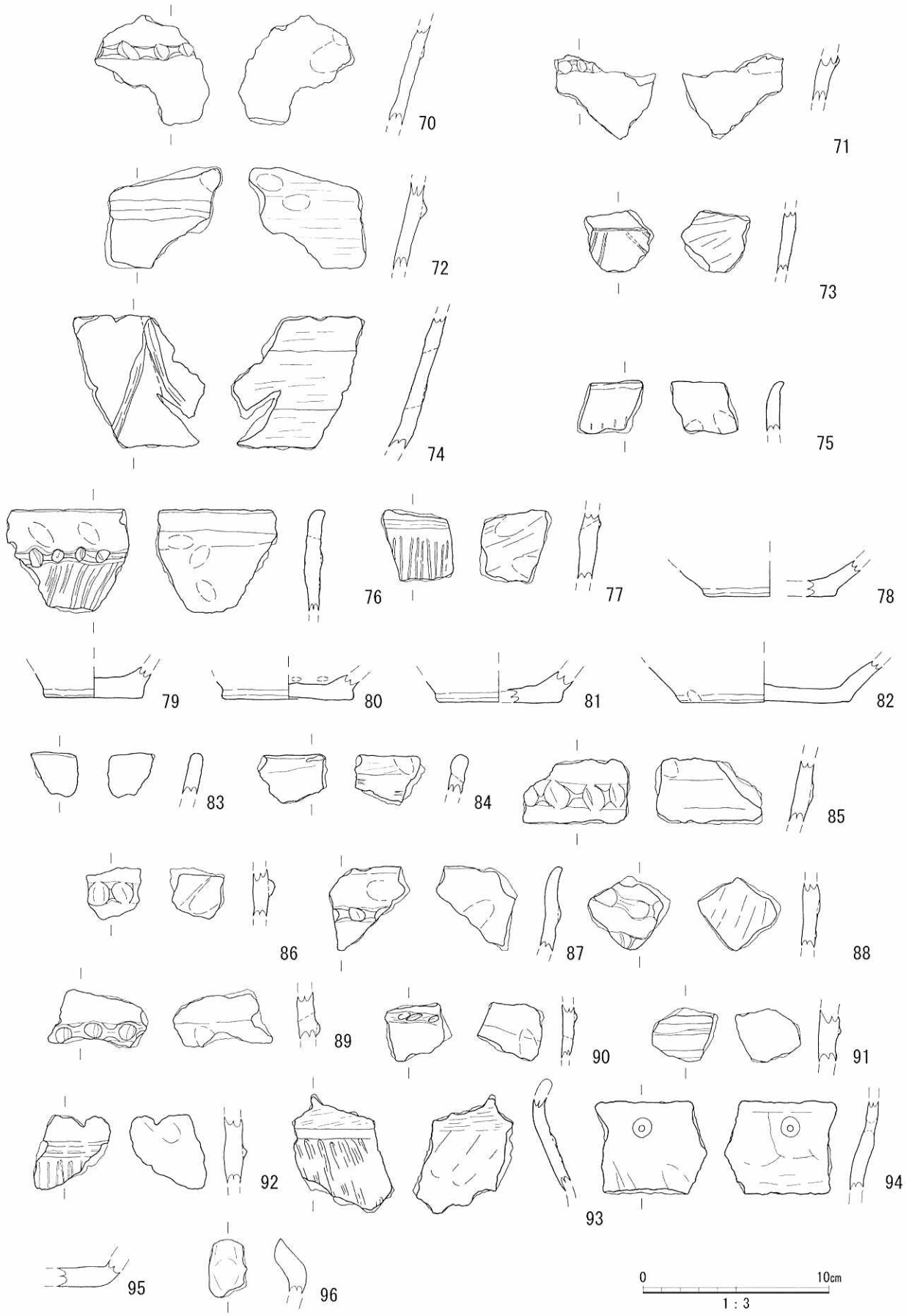
第 13 図　出土土器実測図（海岸部層位不明）



第 14 図　出土土器実測図（谷部第５・４層）



第 15 図　出土土器実測図（谷部第４層）



第 16 図　出土土器実測図（谷部第３層・層位不明）

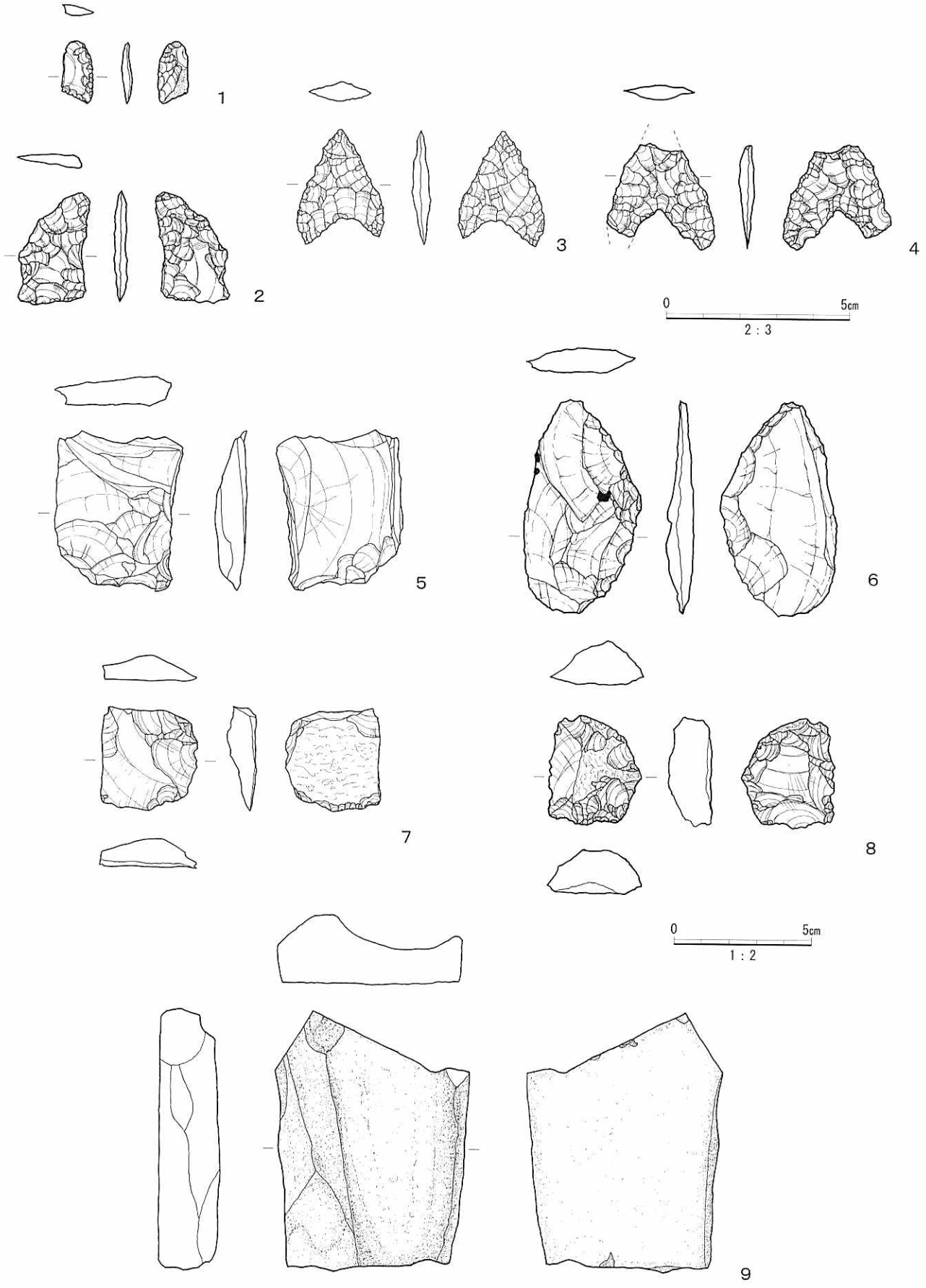
第３表　出土土器観察表　() は復元径

No	器形	残存部位	法量（cm）			文様	分類	色調	焼成	胎土	調査区	層位	備考
			口径	底径	器高								
1	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：暗赤褐（5YR3/2） 内：明褐（7.5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第４層	
2	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：明赤褐（5YR5/6） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第４層	
3	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：暗赤褐（5YR3/2） 内：黒（10YR2/1）	良好	緻密	海岸部	第４層	
4	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ-a	外：にぶい赤褐（5YR5/3） 内：黒褐（7.5YR3/1）	良好	緻密	海岸部	第４層	同一地点で丹塗磨研土器出土 5と同一個体 内面に条痕
5	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：にぶい赤褐（5YR5/3） 内：黒褐（7.5YR3/1）	良好	緻密	海岸部	第４層	4と同一個体
6	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ-a	外：褐（10YR4/3） 内：暗褐（10YR3/3）	良好	緻密	海岸部	第４層	
7	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ-a	外：にぶい赤褐（5YR4/3）） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第４層	
8	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：にぶい赤褐（5YR4/4） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第４層	
9	不明	胴部	—	—	—	隆帯文＋隆起線文	Ⅲ-c	外：明赤褐（2.5YR5/6） 内：にぶい赤褐（5YR4/4）	良好	緻密	海岸部	第４層	
10	不明	胴部	—	—	—	沈線文	Ⅳ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：明褐（7.5YR5/8）	良好	緻密	海岸部	第４層	内面に条痕
11	不明	底部	—	(7.0)	—	—	—	外：黄（2.5YR8/6） 内：明黄褐（2.5YR6/6）	良好	緻密	海岸部	第４層	
12	不明	底部	—	(7.5)	—	—	—	外：明赤褐（10YR3/2） 内：黒褐（5YR5/8）	良好	緻密	海岸部	第４層	
13	深鉢	口縁部～胴部	(33.4)	—	—	隆帯文	ＩＡ-a	外：明褐（7.5YR5/6） 内：にぶい褐（7.5YR5/4）	やや良好	緻密	海岸部	第４層	
14	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ-a	外：灰褐（5YR5/2） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第３層	
15	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：橙（7.5YR6/6） 内：にぶい橙（7.5YR6/4）	良好	緻密	海岸部	第３層	
16	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：にぶい褐（10YR4/3） 内：褐（10YR4/4）	良好	緻密	海岸部	第３層	
17	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：にぶい黄褐（10YR5/4） 内：橙（7.5YR6/8）	良好	緻密	海岸部	第３層	
18	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-c	外：暗灰黄（2.5YR4/2） 内：黄褐（2.5Y5/3）	良好	緻密	海岸部	第３層	
19	深鉢	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-c	外：にぶい黄褐（10YR4/3） 内：褐（10YR4/4）	良好	緻密	海岸部	第３層	20と同一個体
20	深鉢	口縁部～胴部	(21.2)	—	—	隆起線文	Ⅱ-c	外：褐（7.5YR4/3） 内：褐（7.5YR4/3）	良好	緻密	海岸部	第３層	19と同一個体 内面に条痕
21	深鉢	口縁部～胴部	(32.0)	—	—	隆起線文＋豆粒文	Ⅲ-c	外：にぶい黄褐（10YR4/3） 内：明褐（7.5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第３層	補修孔 内面条痕
22	不明	口縁部～胴部	—	—	—	隆帯文＋隆起線文	Ⅲ-a	外：にぶい赤褐（2.5YR5/4） 内：明褐（2.5YR5/8）	良好	緻密	海岸部	第３層	内面に条痕

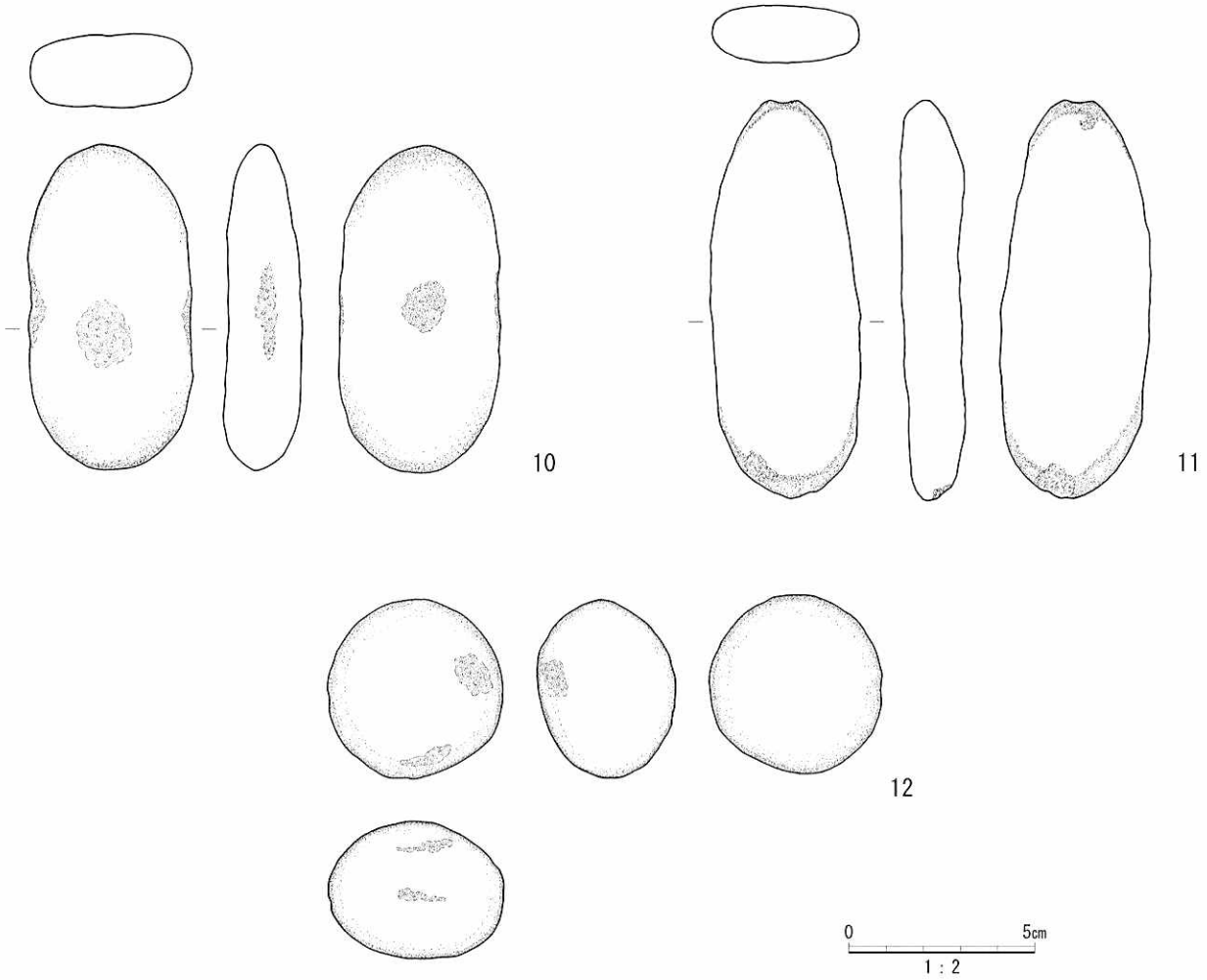
23	不明	胴部	—	—	—	沈線文	Ⅳ	外：にぶい黄褐（7.5YR5/4） 内：明赤褐（5YR5/8）	良好	緻密	海岸部	第３層	
24	不明	底部	—	(7.3)	—	—	—	外：褐（7.5YR4/6） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第３層	
25	不明	底部	—	(6.8)	—	—	—	外：明赤褐（5YR5/8） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	第３層	
26	不明	口縁部	—	—	—	—	—	外：暗褐（10YR3/3） 内：褐（7.5YR4/3）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
27	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：明赤褐（5YR5/6） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	やや密	海岸部	層位不明	
28	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：橙（5YR6/6） 内：橙（5YR6/6）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
29	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：にぶい褐（7.5YR5/3） 内：にぶい褐（7.5YR5/3）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
30	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：明黄褐（10YR6/6） 内：明黄褐（2.5YR6/6）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
31	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：橙（5YR6/6） 内：にぶい赤褐（5YR4/3）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
32	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：褐（7.5YR4/6） 内：暗褐（7.5YR3/3）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
33	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：褐（7.5YR4/4） 内：にぶい黄褐（10YR4/3）	やや不良	緻密	海岸部	層位不明	
34	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＢ	外：灰褐（7.5YR5/2） 内：橙（5YR6/6）	良好	密	海岸部	層位不明	
35	不明	胴部	—	—	—	隆帯文＋隆起線文	Ⅲ	外：明赤褐（5YR5/6） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
36	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：にぶい赤褐（5YR4/4） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
37	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：暗赤褐（10YR3/3） 内：橙（5YR6/8）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
38	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：黒褐（2.5YR3/1） 内：黒褐（10YR3/1）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
39	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：橙（7.5YR6/6） 内：にぶい橙（10YR5/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
40	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-c	外：にぶい褐（7.5YR5/4） 内：にぶい橙（7.5YR6/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
41	不明	胴部	—	—	—	—	—	外：暗赤褐（5YR3/3） 内：明黄褐（2.5YR6/6）	良好	緻密	海岸部	層位不明	外面にミガキ
42	不明	胴部	—	—	—	隆帯文＋沈線文	Ⅲ	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：にぶい橙（7.5YR6/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
43	不明	胴部	—	—	—	沈線文	Ⅳ	外：黒褐（7.5YR3/2） 内：にぶい褐（7.5YR/5/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	
44	不明	胴部	—	—	—	沈線文	Ⅳ	外：明黄褐（10YR6/6） 内：にぶい黄橙（10YR6/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	内面に条痕
45	不明	胴部	—	—	—	隆帯文＋沈線文	Ⅲ-a	外：にぶい橙（7.5YR6/4） 内：橙（7.5YR4/4）	良好	緻密	海岸部	層位不明	幅広の粘土紐を貼付

46	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA-a	外：橙（5YR6/6） 内：にぶい黄褐（10YR5/3）	良好	緻密	谷部	第５層	
47	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：黒褐（7.5YR5/4） 内：にぶい褐（7.5YR5/4）	良好	緻密	谷部	第４層	
48	不明	口縁部～胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい黄褐（10YR5/4）	良好	緻密	谷部	第４層	
49	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：明褐（7.5YR5/6）	やや良好	緻密	谷部	第４層	
50	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：灰黄褐（10YR4/2） 内：にぶい赤褐（5YR5/2）	良好	緻密	谷部	第４層	
51	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：暗褐（10YR2/3） 内：赤褐（5YR4/6）	良好	緻密	谷部	第４層	
52	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：灰褐（5YR5/2） 内：にぶい褐（5YR6/4）	良好	緻密	谷部	第４層	53と同一個体
53	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：灰褐（5YR5/2） 内：にぶい褐（5YR6/4）	良好	緻密	谷部	第４層	52と同一個体
54	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩB-a	外：明赤褐（5YR5/6） 内：赤褐（5YR4/6）	やや不良	緻密	谷部	第４層	
55	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：褐（7.5YR4/3） 内：黒（10YR2/1）	良好	緻密	谷部	第４層	内外面ともに条痕
56	深鉢	口縁部～胴部	（40.0）	—	—	隆帯文	ＩA-a	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：浅黄橙（10YR8/4）	良好	緻密	谷部	第４層	
57	深鉢	口縁部～胴部	（37.4）	—	—	隆帯文	ＩA-a	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：にぶい褐（7.5YR5/3）	良好	緻密	谷部	第４層	
58	不明	口縁部～胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA-a	外：灰褐（5YR5/2） 内：暗灰黄（2.5YR4/2）	良好	やや密	谷部	第４層	
59	浅鉢	口縁部	（17.4）	—	—	—	Ⅳ	外：灰黄褐（10YR5/2） 内：灰黄褐（10YR5/2）	良好	緻密	谷部	第４層	
60	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-a	外：明褐（7.5YR5/6） 内：極暗褐（7.5YR2/3）	良好	緻密	谷部	第４層	
61	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：明褐（7.5YR5/8） 内：黄橙（7.5YR8/8）	良好	緻密	谷部	第４層	
62	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-a	外：橙（7.5YR6/6） 内：にぶい黄褐（10YR4/3）	良好	緻密	谷部	第４層	
63	不明	胴部	—	—	—	隆帯文＋刺突文	Ⅲ-a	外：赤褐（5YR4/6） 内：にぶい明褐（5YR5/4）	良好	緻密	谷部	第４層	
64	不明	底部	—	（4.4）	—	—	—	外：赤褐（5YR4/6） 内：赤褐（5YR4/6）	良好	緻密	谷部	第４層	
65	不明	底部	—	7.5	—	—	—	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：灰褐（7.5YR4/2）	良好	緻密	谷部	第４層	
66	深鉢	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：にぶい黄橙（10YR7/4） 内：にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	緻密	谷部	第４層	赤色顔料塗布の痕跡 同一地点で別個体の丹塗磨研土器出土
67	深鉢	胴部	—	—	—	—	—	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：灰褐（5YR4/2）	良好	緻密	谷部	第４層	補修孔
68	深鉢	口縁部～胴部	（25.0）	—	—	隆帯文	ＩA-b	外：明赤褐（5YR5/6） 内：にぶい赤褐（5YR4/3）	良好	緻密	谷部	第４層	
69	鉢	口縁部～胴部	（13.0）	—	—	隆帯文	ＩB-b	外：褐（10YR4/4） 内：黒褐（10YR3/2）	良好	緻密	谷部	第４層	
70	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：黒褐（7.5YR3/2） 内：黒（7.5YR2/3）	良好	緻密	谷部	第３層	
71	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩA	外：黒褐（7.5YR3/2） 内：黒（7.5YR2/3）	良好	緻密	谷部	第３層	

72	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：明赤褐（5YR5/8） 内：橙（7.5YR6/8）	良好	緻密	谷部	第３層	
73	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-b	外：褐（7.5YR4/6） 内：褐（7.5YR4/4）	良好	緻密	谷部	第３層	
74	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：明褐（7.5YR5/6） 内：明褐（7.5YR5/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
75	不明	口縁部	—	—	—	沈線文	Ⅳ	外：明黄褐（10YR6/6） 内：明黄褐（10YR7/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
76	不明	口縁部	—	—	—	隆帯文＋隆起線文	Ⅲ-c	外：明赤褐（5YR5/6） 内：褐（7.5YR4/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
77	不明	胴部	—	—	—	隆起線文＋沈線文	Ⅲ-c	外：明赤褐（5YR5/6） 内：橙（7.5YR6/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
78	不明	底部	—	(6.8)	—	—	—	外：褐（7.5YR4/4） 内：灰褐（7.5YR4/2）	良好	緻密	谷部	第３層	
79	不明	底部	—	(5.2)	—	—	—	外：明赤褐（2.5YR5/6） 内：明赤褐（2.5YR 5/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
80	不明	底部	—	(7.0)	—	—	—	外：明褐（7.5YR5/8） 内：橙（7.5YR7/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
81	不明	底部	—	(6.6)	—	—	—	外：明赤褐（2.5YR5/6） 内：灰黄褐（10YR5/2）	良好	緻密	谷部	第３層	
82	不明	底部	—	(9.0)	—	—	—	外：明赤褐（5YR5/8） 内：橙（5YR6/6）	良好	緻密	谷部	第３層	
83	不明	口縁部	—	—	—	—	—	外：灰褐（7.5YR5/2） 内：褐灰（10YR4/1）	良好	緻密	谷部	層位不明	
84	不明	口縁部	—	—	—	—	—	外：にぶい黄褐（10YR5/3） 内：黒（10YR2/1）	良好	緻密	谷部	層位不明	
85	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：赤褐（5YR4/6） 内：褐（7.5YR4/4）	良好	緻密	谷部	層位不明	
86	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：にぶい赤褐（5YR5/4） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	
87	不明	口縁部～胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：黒褐（7.5YR5/4） 内：にぶい褐（7.5YR5/4）	良好	緻密	谷部	層位不明	
88	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：明赤褐（2.5YR5/6） 内：赤褐（2.5YR4/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	
89	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：明赤褐（2.5YR5/6） 内：赤褐（5YR4/3）	良好	緻密	谷部	層位不明	
90	不明	胴部	—	—	—	隆帯文	ＩＡ	外：褐（7.5YR4/6） 内：灰褐（7.5YR4/1）	良好	緻密	谷部	層位不明	
91	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ	外：灰褐（7.5YR4/2） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	
92	不明	胴部	—	—	—	隆起線文＋沈線文	Ⅲ-c	外：にぶい赤褐（5YR4/3） 内：にぶい赤褐（5YR4/3）	良好	緻密	谷部	層位不明	
93	不明	胴部	—	—	—	隆起線文	Ⅱ-c	外：にぶい褐（7.5YR5/3） 内：橙（7.5YR6/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	
94	不明	胴部	—	—	—	—	—	外：にぶい褐（7.5YR5/4） 内：明赤褐（5YR5/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	補修孔
95	不明	底部	—	—	—	—	—	外：橙（7.5YR6/6） 内：黒（7.5YR2/1）	良好	緻密	谷部	層位不明	底径復元不可 断面図のみ掲載
96	不明	把手	—	—	—	—	—	外：橙（7.5YR7/6） 内：橙（7.5YR7/6）	良好	緻密	谷部	層位不明	



第 17 図　出土石器実測図（１）　１～４は 2/3、５～９は 1/2 で掲載



第 18 図　出土石器実測図（２）

第４表　出土石器観察表

No.	器種	石材	法量				備考	調査区	層位
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）			
1	石鏃	黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.3		海岸部	層位不明
2	石鏃	黒曜石	2.9	1.7	0.4	2.0		谷部	層位不明
3	石鏃	黒曜石	3.2	2.3	0.5	2.1		海岸部	第３層
4	石鏃	黒曜石	2.9	3.0	0.4	2.6	上半部と端部が欠損	谷部	第４層
5	スクレイパー	頁岩	5.6	4.5	1.1	37.2		谷部	第４層
6	スクレイパー	安山岩	7.8	4.0	1.0	37.8		海岸部	層位不明
7	スクレイパー	黒曜石	3.6	3.4	1.0	14.4		谷部	第４層
8	スクレイパー	黒曜石	4.0	3.4	1.6	21.7		海岸部	第３層
9	砥石	砂岩	9.4	7.1	2.5	185.0	一部欠損	海岸部	層位不明
10	敲石	砂岩	8.8	4.3	2.0	111.0		谷部	層位不明
11	敲石	頁岩	10.8	4.0	1.6	112.5		海岸部	層位不明
12	敲石	砂岩	4.8	4.8	3.7	93.7		海岸部	層位不明